

グ ロー バ ル セ ン タ ー 年 報

第 27 号

令 和 4 （2022）年 度

大 阪 教 育 大 学 グ ロー バ ル セ ン タ ー

目 次

第一部 寄 稿

巻頭言	箱 崎 雄 子	1
	(グローバルセンター長)	

コロナ禍の「海外文化研究」オンライン授業の試み	出 野 文 莉	2
	(表現活動教育系・美術書道教育部門)	

ウィズコロナ下の海外短期研修		
2022 年度前期カナダ語学研修実施報告	橋 本 健 一	12
	(多文化教育系・英語教育部門)	

戸板保佑『乗除通変算宝』(1780 年)	城 地 茂	16
	(多文化教育系・グローバルセンター)	

教職志望者のグローバルな視野を養う		
日タイ大学生国際交流プログラムの		
実践及び効果に関する考察	王 林 鋒・浅 井 温 子	26
	(高度教職開発部門・学術連携課国際室国際交流係)	

第二部 グローバルセンター記録

令和 4 年度 グローバルセンター活動報告	35
令和 4 年度 グローバルセンター行事	54

付 記

令和 4 年度 令和 4 年度グローバルセンター担当教員名簿	62
令和 4 年度 令和 4 年度グローバルセンター運営委員会名簿	64

編集後記	65
------------	----

巻頭言

箱崎 雄子

グローバルセンター長

グローバルセンターは、国内外の教育・研究機関と連携して教員養成の機能強化を図るとともに、学生交流及び学術交流の企画・立案、留学生の受入れ・派遣の推進及び教育研究面での国際活動の充実を図り、社会のグローバル化に対応できる人材養成を推進することを目的として 2018 年 2 月に設置されました。そして、2019 年 12 月から世界中に広がった新型コロナウイルス感染症は、大学の国際交流の在り方に大きな影響と変化をもたらしました。それから 3 年 3 か月が経とうとしていますが、この間、グローバルセンターにおいては、この未曾有の出来事への対応力が試されることになりました。

今年度は、ウィズコロナ時代への移行とともに、国際交流を再開した年でした。新型コロナウイルス感染症の流行以来、国際交流活動のほとんどがオンラインによるものに限定されていましたが、世界的にも新型コロナウイルス感染症とともに生きる「ウィズコロナ」へと転換が進みました。

2022 年 4 月には、学位取得を目的とする新入留学生 48 名が、大阪教育大学に入学しました。また、インド、エストニア共和国、ガーナ共和国、クウェート国、クロアチア共和国、ケニア共和国、大韓民国、パキスタン・イスラム共和国、フィリピン共和国、ミャンマー連邦共和国、メキシコ合衆国から 12 名の教員研修留学生が本学に来られ、それぞれ学校教育に関する研究を進められました。

昨年度、新型コロナウイルス感染症流行の影響で、海外短期研修は中止を余儀なくされ、本学の協定校等で実施するオンライン語学研修プログラムのみが実施されました。しかし、2021 年度後期交換留学生派遣を皮切りに、長らく停滞していた国際交流が動き出し、現在、11 名の学生が 7 つの国・地域（大韓民国、台湾、ベトナム社会主義共和国、スイス連邦、ドイツ連邦共和国、フィンランド共和国、アメリカ合衆国）で勉学に励んでいます。また、海外短期研修についても来年度前期にはカナダ、フランス共和国、タイ王国、後期にはアメリカ合衆国、オーストラリア連邦、シンガポール共和国などで実施する予定になっています。

大学内での取り組みとしては、2022 年 11 月に「第 13 回グローバルセンター国際シンポジウム」をオンラインで実施しました。「大学の国際化・多文化化」をテーマに、国内外のゲストスピーカーのご講演後、コロナ禍をきっかけに増加したオンラインによる海外実習の取組と今後の展望、そして、ポストコロナ時代を見据えた大学の国際化のあり方について考えました。Zoom のチャット機能を活用することで、質疑応答の際には、対面での開催と同様の活発な意見交換が行われました。講演者のお一人は、本学の協定校であるフランスのリヨン第三大学からリアルタイムでご参加くださいました。時差を考慮する必要がありましたが、このような実施形態の成功は、ポストコロナ時代の国際シンポジウムの開催方法に関して新たな選択肢を示すことができたのではないのでしょうか。

グローバルセンターでは、これからも教職員が一丸となって、キャンパスの国際化を止めない工夫を重ねていく所存です。引き続き、ご指導ご鞭撻をお願い致します。

コロナ禍の「海外文化研究」オンライン授業の試み

出野 文莉（張莉）

表現活動教育系・美術書道教育部門

はじめに

コロナによる生活環境の変化が始まってから3年目になる。大学の授業も対面授業が減り、オンラインによる授業が増えた。また、5年間中国天津市で行ってきた海外文化研修も中止された。現在はグローバル社会であり、学生たちを伴った海外文化研修をぜひとも継続していきたいという考えをもっていたので、何とかその思いを継続したいと思っていた。その結果、思いついたのが中国の書家や水墨画家に授業の動画を送っていただき、オンデマンドで学生たちに授業することであった。昨年度（2021年）は第一回目として天津の有名書家 曹柏崑先生、同じ天津の水墨画家 劉琚先生、それから山東省済南市の陳靖先生が「海外文化研究」としてオンデマンド講義の依頼を快く受けていただいた。今年度（2022年）は第二回目として、昨年と同じ先生方にオンデマンド講義の依頼をした。

曹柏崑先生は、天津師範大学名誉教授で書道家の間でも抜群に愛好者の多い宋代の米芾の書風を受け継ぐ正統な書家で、中国国内では大変有名である。今回は、篆書・隸書・楷書・行書・草書の五書体について各々の基本的な筆使いをお教えいただいた。学生たちにとっては、やや日本の書法とは異なった曹先生ならではの力強くきれいな線や字形は驚きの眼差しで鑑賞したようである。素晴らしい書と出会った感激は、学生達にはいつまでも頭に残るであろう。このような授業に触発されて、さらに学生たちの書の上達が進むように期待したい。

劉琚先生は天津大学王学仲芸術研究所の新鋭の水墨画家で、特に植物画に優れている。水墨画の筆使いは側筆を使った方法や濃淡をきれいに描く方法など書道とは少し異なるが、大いに書道の筆使いの参考にもなる。また、書道の学生の中には水墨画を描いてみたいという人も多く、非常に楽しい学習になったようである。

陳靖先生は済南市の山東芸術学院書法学院で書法を教えている書家である。山東省の泰山刻石・崗山摩崖石刻・雲峰刻石・五鳳刻石・北朝仏教摩崖経などに刻まれた漢字の鑑賞について講義していただいた。山東芸術学院書法学院のある山東省は孔子廟や泰山など古くからの刻石の宝庫であり、普段は教材で古典の書の拓本を見るだけなので、これらの刻石の鑑賞について説明頂けることは学生たちにとっては貴重な体験である。

中国の書法と日本の書道の違いについては私 出野文莉が説明した。私はもともと中国の天津市少年宮で子供たちに書法を教えていたのでその体験など話した。また、日本の書写・書道教育の方法との違いを説明するために、中国天津で書法教育について有名な瑞景小学校の実態を報告した。

以下に25名の受講生の感想を記したいと思う。

1. 曹柏崑先生による五体（篆書・隸書・楷書・行書・草書）書法の講義についての学生の感想 篆書を習う

私は今回学んだ篆書について述べる。篆書体は五書体の中で最も古い書体とされている。そんな篆書の特徴としては線の太さの統一、起筆の逆入、左右対称などが挙げられる。私は今回泰山刻石を臨書したが、主に感じた難点としては、左右対称という点である。線を引くときに余白の差が出てしまったり、長さが違ったりしてしまうことがあった。しかし、工夫できたと感じた部分もある。臨書であることを意識しつつ、少し動きのある感じに仕上げたいと思い、先に述べたような特徴を踏まえて書くことに挑戦してみた。私はこれから篆書体を深く考えていきたいと考えているので、今回学んだことを活かし、古典からいろいろなことを読み取り、表現できる力を身につけて、自分の作品制作に活かしていきたいと考える。



(上内美裕)

篆書を習う

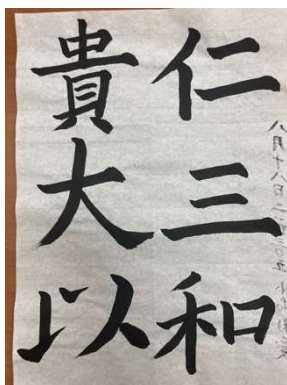
秦の丞相・李斯の筆になる篆書で、秦の始皇帝が同書の書体を初めて認定した際の書体であり、中国で最も優れた書体の一つとして見られている。公文書用の標準化されたこの篆書は中国の歴史においては多大な影響をしている。篆書体の特徴としては篆書体は比較的すっきりとしたシンプルな書体である。篆書は一筆で完結しているように見えるが、実際には何筆も重なって書かれているものが多い。



ここで、篆書の書き方を少し紹介する。字を書く際に、真ん中から、次に左、右という順で書くのは篆書の最も基本的な書き方である。対称性とバランスが重視されているから。一文字の形には、端正さと四角さ、長さとの比率よく取れるかどうかのポイントである。こうすることで、バリエーションをよく表現できる。篆書は重厚で、力強さと分量が均整がとれており、純粋でシンプルな美しさを感じることができ、現代社会でも篆書を学習している人々が非常に多くいる。

(周可涵)

楷書を習う



楷書体とは、三過折のリズムで筆をおくり、右上がりの傾向をもつ書体である。また、全体的に右上がりになるという特徴ももっている。篆書・隸書・行書・草書より後に生まれていることから、これらの影響を受けつつ形を整えてきたことがわかる。小・中・高校では主に楷書を書くことが多かったが、いつも何となく、どのように書くのかあやふやなまま書いていた。今回の講義で、間架結構法という特徴を知り、間隔をあけることで全体的に美しさが際立っていると感じた。また、方向の異なる2つの画を一筆で書く筆づかいであるという特徴も知った。そして、「一」のような字を書くときの始めは、筆鋒を逆に向けて進め、小点をつくり、まるくするのだということも学び、正しい「書き方」がわかった。

教師になる際、再度字を書く機会があると思うので、そのような時に今回の講義を思い出して、美しい書を書けるようにしたい。

(小島彩愛)

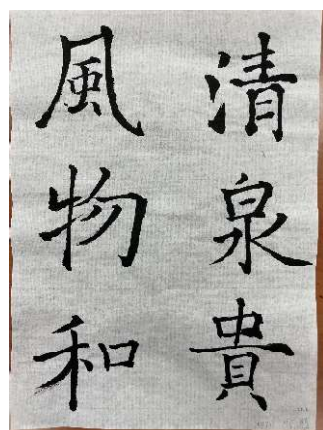
楷書を習う

この3日間の海外文化研究の授業で、印象に残ったのは楷書の学習です。楷書の書き方は今の文字と似ているので、初心者に対して、行、草、篆、隸より書きやすいと思います。楷書の学習には次の二つのポイントがあります。

一つ目は執筆法です。まずは右手の手のひらを開き、4本の指を自然に合わせ、親指は自然に上に向けます。次に右手の薬指と小指、中指と人差し指を自然に少し曲げます。筆をそのまま中指と薬指に当て、右手で縦に持ちます。親指を筆の軸に押し当て、指の動きを感じながら、筆の軸を押します。書法の練習には正しい執筆法が不可欠です。

二つ目は落ち着く、一筆書きから始め、規則正しい字を練習することです。楷書の特徴は一画一画を続けずに、紙から筆を離して書くことです。言うならば、点画を省略したり、字形を崩したりはしません。そのため、右払いも左払いも、細かいところを丁寧に書くことが重要だと思います。

最後に、私の楷書練習作品の写真を添付します。もし機会があれば、将来は楷書をきれいに書けるように頑張りたいと思います。

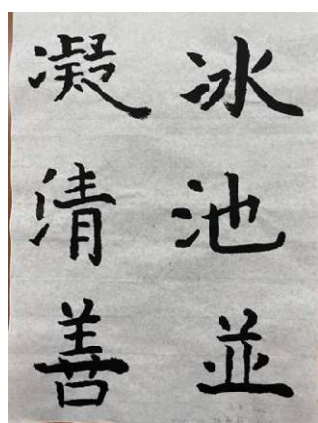


(趙一凡)

楷書を習う

この三日の授業で、私は、中国の書道に関してたくさんものを勉強していた。中国に「書法」と呼ぶ。書法の字体は行書・草書・楷書などがある。授業でこれらの字体を練習して、いろいろな字体の間に著しい差別を感じている。

まず、楷書は整齐で、一画一画を続けずに、筆を離して書く。楷書を見て、字がきれいで、整齐

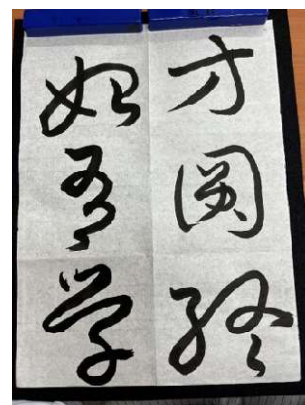


して、書法を練習する時、大部分人が選んでいる。また、行書とは、漢字の書体の一つ。楷書が一画一画をきちんと書いているのに対し、行書体ではいくらかの続け書きが見られる。しかし、草書のように、楷書と大幅に字形が異なるということはないために、楷書を知っていればある程度読むことは可能である。行書の中に、王羲之が著した「蘭亭序」が一番有名だ。そして、草書と言って、速く書くことができるように、同じく漢字の筆書体である行書とは異なり、字画の省略が大きく行われる。文字ごとに決まった独特の省略をするため、文字ごとの形を覚えなければ書くことも読むこともできないことが多い。この授業で、私は中国の書法に関することをたくさん勉強できたと思う。

(張婧旋)

草書を習う

私は、今回の講義で初めて「草書」というものを書いた。これまで、「草書」という言葉自体は聞いたことがあったが、書くことはもちろんなく、見ることも多くはなかった。そのため、書く前は、「習字が苦手な私にこんな難しそうな字が書けるのか。」という不安ばかりが募った。しかし、実際に書いてみると思っていた何倍も楽しく興味深いものであった。走り書きのような字のため、故意に真似するのが難しい字ではあったが、苦戦しながらも何度も練習するのがとても楽しかった。また、「草書」で書かれた漢字が現代のひらがなによく似ている点にもとても魅力を感じた。今まで私は、筆で字を書くことに苦手意識があり、正直習字が好きではなかった。しかし、今回の経験を通して習字がとても好きになった。まだまだ上手ではないものの、自分の満足のいく字が書けたこともあり、苦手意識も小さくなった。そして、漢字が



こんな風にくいっもの字体を経て現代に受け継がれているのを見ると、何かとても壮大なものを感じた。今回、この海外文化研究の講義を受講できたことは、私にとって本当に貴重で大きな経験であった。この講義を受けることができて本当によかったと思う。

(岡部花音)

草書を習う



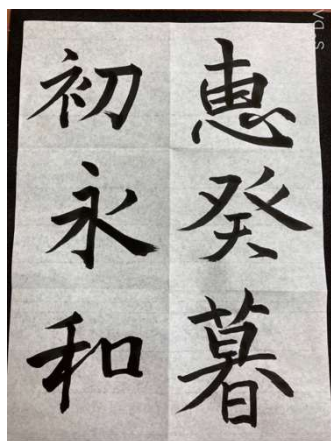
今回の集中講義「海外文化研究」セミナーの授業で書道を学んだ。最初からの楷書、行書とかを書き始めて、水墨画、書道鑑賞までの知識を勉強して、書道の書き方も練習した。自分が一番気にいったのは草書である。

授業で自分が草書何回も書いていたが、自分が書いていた草書を臨書するだけだけど、草書に対しての興味が深くなった。自分から見ると草書は書道の中で最も豊かで情緒的と性格的であるだけでなく、時代によって異なる様式的特徴を示しているもある。草書について調べると、その書風は書を書く個人の教養や美の意識の追求の結果であると同時に、当時の文化的雰囲気や芸術風土とも密接に関連している。現在、草書は文字としての実用的な価値をほとんど失い、教養を表し、感情を表現する芸術品に変わっている。

自分が書を書く時、最も重要なのは、書き人の個性を表すことが大切である。なぜなら、草書を書く時、草書は実用的な実用主義や点描画のルールからの制約から解放され、書く人の個性を自由に発揮し、存分に遊び、存分に演じることができるため、書家の個性を発揮するのに最適な芸術であると考えられる。

(呉桐)

行書を習う



今回私は海外文化研究の講義を受けて、5つの書体で作品を書いていった。その中でも、行書が一番うまく書くことができたと思う。今まで私たちが小学校などで学んできた書体は楷書であり、行書は名前を知っているくらいであまり書いたことがなかった。しかし、それぞれの書体の変遷を学んでから改めて行書とその他の書体の特徴を考えると、行書にしかない魅力を知ることができた。行書は特に早書きに適していて草書よりも読みやすいという点で、古くから実用的に使われているということを学んだ。また、今まで書いてきた楷書と似ているため、篆書などに比べてはらいやはねが書きやすかった。また、半紙の中に6文字を納めなければならなかったのも、文字の大きさやバランスを考えて書いた。

このように色々な書体を続けて書いたり中国の書法について学んだりすることがなかなかないので、貴重な経験ができた。

(植島綾香)

2. 劉琚先生の水墨画実践指導についての学生の感想

蘭の描画

私はこの授業で中国の文化について多くを学んだ。一番印象に残ったのは、水墨画の勉強で蘭を描いたことである。その理由は二つある。一つ目は、蘭は他の花と競合することがなく、隅に単独で咲き、人々に優雅さと静けさを与える。この感覚は隠者のような気質だけでなく、一種の文化でもある。それ

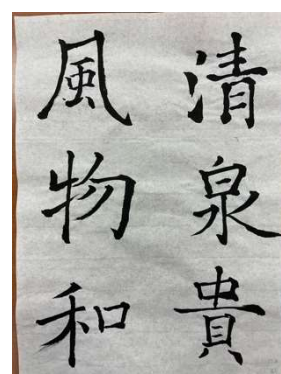
は、名声を求めず、自分の願望だけを追求する一種の精神であり、美しい人格の質を象徴している。そのため、隅に咲く蘭は、古代中国でも多くの文人に愛され、その美しい品質を表す花とされていった。二つ目の理由は、蘭はとても簡単に描けるように見えるが、実際には細部に注意を払う必要があることである。水墨画は、白黒と最小限の筆と墨だけで、芸術的な概念を現実的に伝えることができる。水墨画に関する限り、色の濃さだけでさまざまな細部を区別することができ、多くの学習が必要である。蘭の絵を通して、自分の考えを絵に加えることで、絵と精神的にコミュニケーションし、自分の認識を伝えることができる。



(張加禾)

蘭の水墨画

蘭を書いた時に、ポイントは3つあると感じた。1つ目は蘭の草を描く時に根元を一点に集中させることだ。そうすることで統一感と蘭の自然さが際立ち、より良く描ける気がした。2つ目は花を書く時に淡墨で描くことだ。これはツボミを濃墨で描く際にツボミの濃さを強調しアクセントとなり、違いを際立たせられるからだ。それと同時に鑑賞者が見た時にツボミに自然に目がいくことになる。3つ目はどの絵を描く時にも共通するが淡墨を先に描き、しばらく時間を置いてから濃墨で描く事だ。これは淡墨に含んだ水により濃墨で描いた部分が滲んでしまうのを防ぐためだ。濃墨で描いた部分が大きくなってしまったり滲んで淡墨で書いた部分を濃くしてしまうと絵に引き締まった感じがなくなってしまうと思う。集中講義の感想として、初めの方は臨書の仕方どころか筆の持ち方すらままたまなかったが、コツを掴んでからはどんどん楽しくなってきた。特に細い線が書けるようになってからは力も入れやすく自分の思った通りに絵がかけられるようになって楽しかった。



(中村唯翔)

花の水墨画



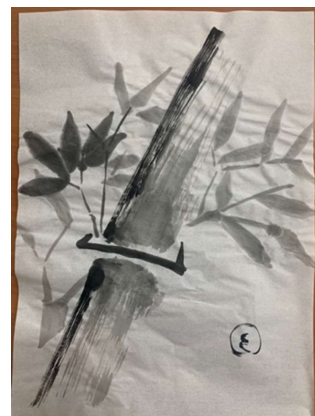
私は、このレポートで水墨画について述べたいと思う。水墨画は私自身初めての体験であったが、取り組んで行く中で普通の絵との違いやその魅力に気づくこととなった。今回は墨液のみで絵を描いたため、特に表現力が求められた。表現技法として濃淡の利用やにじみ、かすれなど様々なものがあり、講師の方の映像を見ながら見よう見まねで取り組んでみたが、花を描く時が最も苦労したと感じる。下の写真は、今回私が挑戦した朝顔の水墨画の写真である。花を描く際に何が最も難しいのかと問われると、花びらにおける、中心から先端にかけてのグラデーションの表現であると答えるだろう。花びら全体のグラデーションにはならなかったものの、花の中心付近のにじみによる濃淡差の表現はうまくできたと感じる。

花の絵に限らず、講師の先生の映像を見ていて筆の使い方や表現の仕方が全く違うものになることを知ることができた。今回の講義を通して水墨画を描く楽しさに気づくことができたので、また挑戦してみたいと思った。

(山中凜人)

竹の描画

今回の講義を受けて、現地へ行って学ぶことはできなかったが、教室でビデオを見ながら書道を書いたり、水墨画を描いたりする体験のもなかなか面白いと思います。そして、その中一番印象に残ったのは水墨画です。水墨画は余白を楽しんで、想像力・光の加減で描かれたものを頭の中に表現できる独自性を強く感じました。ビデオを通じて、私たちは歳寒四君子の中の「蘭・菊・竹」を描いてみました。その中、特に竹の水墨画の描き方はおもしろいと思います。筆を寝かせるように穂の根元から先まで使って、竹の太い幹を描くことができます。そして、カタカナの「ム」のように抽象的に描かれた竹の節の部分もすばらしい技法だと思います。



(魯斯想)

菊の描画



水墨画の作品は見たことがあるが、どうやって描かれたのかは想像したこともありませんでした。この授業を通して、墨液を水で薄め、その濃さの調整によって、絵が綺麗にできるとわかりました。また、毛筆の毛の全体を使うか、毛先の部分だけを使うかもかなり難しく、それを流暢に使えるようになるまでは、随分と練習することが必要です。この授業の先生方はそれについて詳しく丁寧に説明してくれて、初心者でも簡単にできて、実にありがたいと感じました。自分には絵画の才能はないと思いますが、周りの友達の中に水墨画ができる人がいます。その人は時々自分の作品をシェアしてくれていますが、以前は全然分からなくて、

理解できませんでした。今であれば少しでも理解できるようになり、今後の友達と水墨画についての交流も楽しみになりました。

(徐鴻生)

菊の描画



水墨画とは、唐の時代に成立したとされる墨を用いて表現する墨絵の代表的な画法である。ただ、1本の線で描いていくのではなく、墨の濃淡を使用して明暗を表す画法である。この水墨画の良さ、特有の絵の雰囲気は使う道具が筆だけだということにあるといえるであろう。例えば、様々な濃さの鉛筆を用いて描いていくデッサンでも、濃淡を表すことができる。しかし、同じ濃さの1本の鉛筆でこれを表現するのは難しい。筆なら水を加えたり、水を拭き取ったりするだけで、すぐに濃淡を出すことができる。さらに、筆を用いて描く際の力の加え加減1つで、線の太さを調節でき、絵の雰囲気をガラッと変えることも可能であろ

う。また、水墨画にはにじませたり、かすれさせたり、潤渴の違いで絵から受ける力強さも変わる。水墨画は、自身のさじ加減1つで絵の印象を自由に変えることができ、奥深い絵の技法であるといえよう。

今回の講義は、今まで自分が学んできた“書道”とは、少し異なる視点からの学びであると思う。水墨画は、小学生の頃に1度したことがあり、その時に学んだ技法とはまた違ったものだったため、とても面白かった。個人的に、1つの絵の中で墨の濃淡をくっきりと出すことが難しいと感じた。

(古川美咲)

竹の描画

水墨画を描くのは初めてなんですから、うまく描けるまでかなり練習しました。練習の過程から、水墨画の難点が三つあると感じました。一つ目の難点は墨の濃度調節でした。水墨画を自然的かつ立体的に描くために、淡墨、中墨、濃墨の活用が不可欠です。最初からは墨の濃度調節すらできなかったです。水を加え過ぎると薄すぎ理想的な濃度にするために何度もの調整が必要です。二つ目の難点は筆の運筆です。例えば、竹の筋を描きたい場合には筆を横にして軽く擦ることと、水分を控えることが重要です。三つ目は不自然なにじみをさ避けることでした。筆が一瞬ではなく、少し同じところに止まることや既に墨が描かれている場所に重ね描きしたら、水が半紙に染みるので、そのにじみを避けることも大変でした。この授業を受けて新しい体験と中国書道文化の水墨画文化を理解できてとても有意義だと感じました。



(葉雲康)

枝にとまった雀の描画



2 日目の午後から 3 日目の朝にかけて水墨画を行った。水墨画で使われる墨は、濃墨、中墨、淡墨がある。また、墨に含む水分量や筆先だけか、筆全体かなどの違いもある。これらの違いによって絵に厚み・立体感を出したり、表情をつけたりしていた。

実際に私が書いてみると筆が太くなりすぎたり細くなりすぎたりした。墨がまだ濡れているときと乾いてからでは乾いてからの方が色は大分薄くなった。そのため、中墨、淡墨が思っていたよりも大分薄くなった。鳥の足と止まっている枝では細さがかなり違う。共に大筆で描いたので、その差がかなり難しかった。

特に鳥の足は書道でかく細い線よりもさらに細いので描きにくかった。書道と水墨画の両方とも、墨を使い、同じ筆でかくのに様々なところが違うのが興味深い。

(久保沙紀)

枝にとまった雀の描画

私はこの講義で初めて水墨画を描きました。私自身、子供の頃から絵を描くことが好きで、特に模写が得意で何度も絵を褒められた経験があることから、初めての水墨画とはいっても苦戦することはないだろうと思っていました。しかし、使えるのは墨と水だけという限られた条件の中で、掠れや墨の濃淡を駆使しながら奥行きを出したり、世界観を表現することはとても難しく、水墨画を描くためには様々なコツや技法があることを学習しました。例えば、鳥を描く時では、羽の表面の感触を表すために筆を細かく動かしながら毛羽立ちを表現したり、陰影をつけるために同じ色の部分でも一方を濃く書いたりなど、お題に忠実に再現を行うことをに難しさを感じました。また、改善として、筆使いの方について、自分では少しどけ墨をつけたつもりでも含まれている水が予想以上に多く、意図せず滲んでしまったり、細く描きたいところが太くなってしまったりなど、まだまだ練習すべきポイントが沢山見受けられました。

3 日間の集中講義を受けて、今まで知ることのなかった中国の書体を実際に書いてみる形で学習することができ、中国に出向くことができなかつたのは残念ではありますが、実践を通してそれぞれの書体の



背景に触れることができたと思います。また、私自身とても楽しんで書や絵を描くことが出来ました。貴重な体験をありがとうございました。

(早野有紀子)

パンダと雀の描画

「海外文化研究」の集中講義を通して水墨画を描いていく中で、水墨画の繊細さに気づいた。筆圧を少し強くしてしまうだけで途端に線が滲んでしまったり、自分が予想していたよりも太くなってしまったりと非常に力加減が難しかった。筆圧だけではなく、墨の濃淡の調整も水墨画をするにあたって非常に重要であった。私にとっては、淡い墨の色を表現するのが作品を制作するにあたって困難であった。思ったよりも濃くなってしまいうことが多々あった。一つの絵を描いている際に、一箇所でも滲んでしまったり、太くなってしまったりすると途端に作品がアンバランスになってしまい没にせざるを得なくなった。しかし、何枚も水墨画を描いているうちに墨の濃淡で立体感を表現できる事や、動物の質感まで描けることが楽しくなった。墨だけを使って水墨画を描くという経験を集中講義を通して初めて体験できて非常に良かった。



(吉栖朋美)

3. 陳靖先生による山東省の刻石鑑賞についての学生の感想

刻石鑑賞について

陳先生と王先生の山東古代石刻の解説から直感的鑑賞で感じたことを様々な観点から学んだ。石刻は書道の表現芸術の一種であり、作者の感情や伝えたいことを表現できるものである。ビデオを観て、各時代の石刻は様々な表現方法をもって、様々な個性を表した。特に、摩崖石刻は大きな石の表面に幅約 50cm の字を刻んだ。摩崖石刻は雄大な勢いを表現した。石刻の書道でそれらを表現するためには、筆を思いのままに扱える力が必要である。そのためには国語科書写の授業は、子供達に筆や墨を使用する基礎的な力を身に付けるために重要であると感じた。「読みやすい字」「適当に書かない」「だれが見てもわかる字」という意識があるが、書道では、一点一画の運筆を押さえ、丁寧に書くことで文字が大きく変わることを意識することが大事と思う。

(蔡偉杰)

刻石の特徴について

日本の柳田伊秀の書いた「泰山刻石」をみると、石刻の書道は深い文化の影響が存在しているという。山東古代の石刻の書道はよく保存されていて、昔の個性がそのまま残っている。これら石刻は珍しい資料であるので、非常にすばらしい研究価値を持っている。濟寧で、このような石刻がたくさん存在している。その中に、碑文書道と磨崖刻石は非常に研究価値がある。例えば、「孔宙碑」、「史晨碑」、「張猛龍碑」などである。「孔宙碑」には、孔宙の生涯が書かれている。書き味が軽やかである。「史晨碑」は方正、古拙な特色がある。「張猛龍碑」は北魏時代の作品である。字が鋭く、変化が非常に多いである。崖に刻んだ彫刻の中に、「鄭文公碑」は有名なものである。字が丸く、古風で、力強いである。

(陳煌麗)

4. 中国の小学校書法教育の実態報告（張莉）についての学生の感想

瑞景小学校の書道の様子

私は中国からの留学生で、小学生の頃から書道に触れてきました。学校の壁には、私たちがよく勉強するように行書に書かれた格言があります。学校に行けば、毎日目にすることができ、無意識のうちに美に対する意識が高まり、書道の技法も上達します。そして、学校では毎週書道の授業があり、筆を使うのではなく、鉛筆や万年筆を使って書く授業もあります。授業に楷書と行書を教えているところが多いですから、顔真卿や欧陽詢の描紅で練習することもよくあります。また、書道に関するサー



クル活動もあります。さらに、学校では書道コンクールや書道展を開催されます。学生たちは書道への関心を高めるだけでなく、お互いの優れた作品を鑑賞し合うことができました。これまでの書道教育では習わなかった篆書、隶書、草書の書き方についても学ぶことができ、大いに収穫がありました。

（王莉波）

中国での書道体験

この授業で、中国天津市の小学校での書法教育についてを学んだ。中国から日本に留学した私も、書法教育を受けたことがある。また、私は高校でも紹介した内容と似たような書道教育を受けていた。私の高校では、授業で紹介された小学校のように、書法作品を刻した石があり、廊下では生徒の書画が展示されていることもあった。そして、学校で週に一度の書法授業があった。しかし、学校では学期末試験を行わず、各生徒の日々の課題を通して教師が評価した。また、学校では定期的に書道コンクールがある。各クラスから優秀な作品が選ばれ、一緒に展示され、順位がつけられる。上位3名には賞品と賞状がある。さらに、先生方も大会に参加され、一緒に書道の練習されることもある。この写真は、書道コンクールの時に撮ったものである。



（王雨洪）

瑞景小学校の書道環境

中国の書法教育には日本とかなり違いがあるということが分かりました。日本では小学校の国語の授業の一環で書写を行う機会がありますが、瑞景小学校のように学校全体が書に力を入れている、児童が幅広く書をたしなむことはありません。書道は中国が発祥とされており、この文化が国、国民の全体で大切にされていることがうかがえます。また、教師は常に子供の手本となり、よりよい環境で授業を行わなければならない存在であるため、教師自身も努力を怠らない姿勢に感銘を受けました。教師と児童がともに書道に対して向き合える体制が整っていることは、教師と児童間の信頼関係を築くというところで教育現場にもよりよい影響を与えているのではないだろうかと感じました。このような環境が整っているからこそ、書道はこれからもより深く広く広がっていくのだと思いました。

（長谷川美友）

日本と中国の書道教育の相違

書道教育を通して、日本と中国の文化の違いをととてもはっきりと感じました。まず、日本の学校には先生が書いた教訓や四字熟語が飾られることはまずないでしょう。飾られたとしても児童生徒の作品であることが多数だと思います。中国では良い生徒の作品を写真付きで称えたり、競争力を持たせますが、日本では個性があつて良いという一括りでまとめてしまっていると感じます。こういった競争力を持たせるという行いはとても良いなと感じました。また、「ほめて育てる」ではなくて「叩いて育てる」という価値観にも驚きましたし、良くないところはどこか、改善点を指摘し合うという子どもたちの姿勢はとても教育としては良いと感じました。書道という教材を用いるには、より中国の文化や学校現場で行われてることを学習していかなければならないと痛感しました。

(蜂須賀辰政)

中国の小学校書法教育

書道教育は学生の芸術的素質を高めるのに役立つ。小学校の書道教育の基本的な目的は、優れた書道作品を模写し、視覚的、精神的な楽しみを得ることである。知らず知らずのうちに学生に美の影響を受けさせ、書道の美を認識させ、学生の審美能力と鑑賞能力を高め、学生に自分の芸術素質を高めさせる。

そして、私たちは誰もが社会や他人とつながり、手紙のやりとりは最も一般的な形式と言えるでしょう。手紙を書く人の字が上手であれば、受取人はスムーズに読みやすくなり、情報伝達の目的を達成するのに役立つだけでなく、相手に好感を持たれ、さらに付き合いやすくなる。

パソコンや携帯電話の普及に伴い、私たちは字を書く機会が少なくなってきました。いざ字を書く必要があるとき、字の書き方が曖昧になり、合ってるかどうか分からない、自動変換もないので、漢字の書き方すらわからなくなった。誰でも書を書けるようになると言わない、書道のことを少し心がけてれば、こういった状況も減っていくではないかと思う。

(馬健)

おわりに

コロナ禍が終わると、また学生を引率した中国への研修旅行が再開することができる。コロナ感染の状況が一体いつまで続くのだろう。コロナ禍の収束までは、今回のようなオンデマンドの授業を行ない、中国の有識者とのグローバルな交流を行ない、交流を絶やさず継続していきたいと考えている。

大学生活における学生たちの成長を求めた場合に、グローバル的な体験を行なうことは非常に大事なことだと思われる。そこでは、自分の考えとは異なる外国の考えを受け入れて、自分の考えを整理してみることの必要性が求められる。今後ますます、外国との接点が近くなり、グローバルな社会が進行していく。グローバル的なものの考え方は学生たちの将来にとってなくてはならない資質である。

学生たちにオンデマンド授業の感想を尋ねると、大変な参考になった、書法の本場中国の知識の奥深さを感じた、いつもと違う新鮮な気持ちで学習できた、などの意見が寄せられた。今後も、学生達には中国の書法の現場からの情報を学んでほしいと思う。コロナ禍のため中国研修旅行は行える環境にないが、そのような場合でも、「海外文化研究」授業のオンデマンドを引き続き実施していきたいと思う。今後は、中国の先生から指導を受けて学生たちが書いた臨書を中国の先生たちにフィードバックして批評を頂くような授業をすることを今後の課題にしたいと思う。

ウィズコロナ下の海外短期研修：2022 年度前期カナダ語学研修実施報告

橋本 健一

多文化教育系・英語教育部門

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的感染拡大により、これまで当たり前だった海外渡航は極めて困難となり、世界的な人的交流は完全に遮断された。本学の学生海外派遣についても、外務省感染症危険レベル 2 又は 3 が世界全域に発出されたこともあり、2020 年度から短期・長期ともストップした状態となっていて、感染状況の改善と悪化を繰り返す中で幾度となく再会の機を窺ってきたが、2021 年度後半に派遣交換留学が再開されるまで約 2 年の我慢の時を過ごした。2022 年度に入り、各国の国境が開き、入国の要件・手続きが徐々に緩和され、航空会社のサービス供給も少しずつではあるが戻ってきており、今後大学間国際交流が再び活発に行われるようになり、学生交流についてもその規模を取り戻していくことが期待される。

このような中で本学学生が海外を体験する最初のステップとしての短期研修も 2022 年度前期から再び実施することとなった。未だ様々なことが不透明であったこともあり、実施したのはカナダ・ビクトリア大学の 3 週間の英語研修のみであったが、多くの学生にとって在学中に一度は海外へという思いがあったのか、説明会時点から多くの関心が寄せられて、後述の通り 11 名の参加者を得ての実施となった。しかし実施側の教職員としては丸々 2 年のブランクがあり、基本的な手続きも逐一確認しながら行う必要があったことに加えて、COVID-19 関係で特別に必要な手続きも多くあり、申込時、出発前、滞在中、帰国時と段階に応じて新たなチャレンジが多くあったことも事実である。今後 COVID-19 が海外渡航に及ぼす影響は徐々に弱まってくることが期待される一方で、既存の制約が長く残る可能性や、今後別の感染症事象の発生により新たな制約が生じてくる可能性もあり、今回の経験を記録・共有しておくことは円滑な研修の実施や危機管理の点で必要かつ有益なことと考えられる。

そこで本稿では、COVID-19 への対応に焦点を当てつつ、研修実施決定から参加者募集、渡航準備、カナダへの渡航、研修先での対応、帰国に至るまで、2022 年度前期カナダ・ビクトリア大学語学研修がどのように実施されたかを記録する。手探りの中での実施であり、全ての局面でパーフェクトな対応ができたということではないが、現時点で考えられる改善点や今後同様の事象が発生した際に考慮すべき点を明らかにすることで、将来の研修のより円滑な実施に資する情報を共有することが目的である。

2. 研修実施決定まで

（1）研修実施検討・実施する研修の決定

本学の学生海外派遣は COVID-19 の影響で交換留学・海外短期研修とも 2020 年度からストップしていたが、限定的ながらも派遣再開へと舵を切る大きな要因となったのは、2021 年 6 月に文部科学省から示された、学位取得を目的とする留学や 9 か月以上の交換留学による学生派遣再開を容認する旨の通知である。これを受けて本学においても学生の長期的な修学計画に大きな影響を与える交換留学の派遣が再開できることとなった。次いで 2022 年 2 月に 9 か月以下の学生派遣についても大学が学生の安全確保を担保することを条件に再開が認められ、トビタテや JASSO 海外留学支援制度等の給付型奨学金の支給も再開される旨が文書で通知されたことにより、短期研修についても再開すること

が可能となった。これを受けて本学の海外短期研修の企画・実施を司るグローバルセンター国際教育部門で海外短期研修の再開の是非が検討され、以下の条件を満たす研修について 2022 年度前期から徐々に再開することとした。

- ① 実施については、原則的に研修の担当教員と協議のうえ決定する。
- ② ただし、研修実施国で厳しい入国制限が行われていないことを条件とする。
「厳しい入国制限」とは・・・ワクチン接種証明書提示の有無にかかわらず、概ね 3 日以上の上の隔離期間が設けられていること。
- ③ 実施の方針で準備を進めた場合も、研修実施国が入国制限を変更し、②で示された厳しい入国制限が適用された場合には、研修が中止となることを募集の際に周知徹底する。
- ④ 外国への入国時及び日本への帰国時の隔離期間中に係る滞在費等が発生した場合は自己負担とし、募集の際に周知徹底する。
- ⑤ ワクチン未接種の学生の参加については、研修実施国が未接種者に対し、追加の隔離措置を求める場合には不可とする。（陰性証明の提出だけで済む場合などは参加可とする。）また、研修実施国がワクチン未接種者の入国を原則認めていない場合には参加不可とする。（アメリカ・カナダなど）

上記条件に基づき、これまでグローバルセンターで実施してきたものを中心にどの研修を実施するか検討されたが、派遣国の感染状況や入国制限、受け入れ機関や滞在先（ホームステイ・ホテル・学生寮）に関わる制限、渡航手段（飛行機の利用可能状況）、さらには派遣国に応じた日本帰国時に必要な対応等さまざまなことが考慮され、結果的にはカナダ・ビクトリア大学における 3 週間の英語・文化研修が実施されることとなった。

（2）研修説明会・募集

研修実施決定を受けて、学生への周知に向けた取り組みが始まった。4 月 27 日（水）に本学が実施する短期研修全体と前期に実施するビクトリア大学での研修の説明会が開催されることとなり、これに向けて説明会のフライヤー・研修内容をまとめたパンフレットが作成された。前期に実施される研修がビクトリア大学の研修だけになったため、これらの案内資料については国際交流係が作成することとなった。また並行して研修参加者の取りまとめや航空券・ビザ手配などの渡航手続きに係るサポートを受けるために委託旅行業者との打ち合わせも行い、27 日開催の説明会での参加・渡航手続きに関する説明の依頼をした。その際、上述の短期研修再開条件③を受けて、COVID-19 の感染拡大により研修が実施できなくなる可能性については特に慎重に検討され、募集パンフレットの参加申込方法に注意事項として以下の 2 点が記載された。

- 新型コロナウイルスの世界的感染拡大に伴う今後の世界情勢等により、海外短期研修プログラムが中止になる可能性があります。その際も、申込完了後は、取消料等が発生しますので留意ください。
- 入国には、その国の入国要件を満たす必要があるため留意ください。
例）入国先の政府承認済みのワクチン接種を完了していること。等

1 点目については参加者個人の意思・都合でのキャンセルに加えて、感染拡大に伴い大学として中止

の判断をせざるを得ない場合も一定の取消料がかかることとなっており、参加希望者が申し込むにあたっては大きなリスクの 1 つとなった。2 点目については募集開始当時のカナダの入国制限が「2 回の COVID-19 ワクチン接種済みの場合は入国時の自己隔離プランの提出が不要」ということであったため、事実上「COVID-19 ワクチン 2 回接種」が参加条件となっていた。また日本帰国時には渡航先出国前 72 時間以内の PCR 検査陰性証明が必要であり、この検査において陽性だった場合は帰国の日程を変更して一定期間現地で待機となることも了承の上で参加してもらうこととなった。

学生には説明会について学内のシステム（Live Campus U）を用いて周知され、事前参加登録を受け付けた。オンライン（Zoom 利用）で開催された説明会には約 120 名が参加して、当日都合がつかなかった学生向けに説明会全体の録画やその他の資料が学内 Moodle の短期研修用ページに掲載された。ビクトリア大学の研修内容についても同じ Moodle に掲載されて、随時情報がアップロードされた。ビクトリア大学語学研修への学生の参加申込は①委託旅行業者が指定するフォームへの入力と②参加申込書／同意書、海外旅行のためのお伺い書、パスポートのコピー、カナダ入国ビザ申請書類をメールで委託旅行業者に送信することで受け付けられ、学生が受領確認メールを受け取ることで参加申込手続き完了とした。参加申込については委託旅行業者に取りまとめを依頼しており、最終的に 11 名が参加申込を完了した旨の報告があった。これら 11 名の旅行手続きについては申込時に提出された資料に基づき委託旅行業者が行い、語学学校への申込は団体申込フォームを使って担当教員から行われた。また委託旅行業者には往復の引率教員の旅行手続きについても併せて依頼がなされた。

3. 出発までの準備

出発に向けた準備として、参加者は 6 月中旬に入学許可書と同時に送付されてきた書面・案内に基づき、ビクトリア大学の一連のネットワークサービスを受けるために必要な Netlink ID の設定、英語力の自己評価の入力、学生証用の写真のアップロード等の出発前タスクに取り組んだ。7 月に入って参加者の顔合わせとここまでの手続きの不明点、今後必要な準備について確認する等の目的で、研修参加者と担当教員がオンラインで集まってのオリエンテーションを開催した。この際、日本で一般的に実施されている感染予防対策（例：マスクの着用・手洗い・消毒）以外で、COVID-19 によって渡航前・カナダ入国時・滞在中に以下のような対応が求められることについては特に強調して伝えられた。（渡航前・カナダ入国時の対応は一部オリエンテーション後に更新されたものも含む。記載の対応は全て 2022 年 7・8 月現在のものであり、本稿が刊行される 2023 年 4 月の対応とは異なる。）

【渡航前・カナダ入国時】

- カナダ入国前の PCR 検査は不要だが、ArriveCAN というアプリを使って、COVID-19 ワクチンを 2 回接種完了していることを事前に登録する必要がある。この手続きのために、有効なワクチンを 2 回以上接種した証明（いわゆるワクチンパスポート）が必要となる。
- カナダ入国時に入国者の一部がランダムで COVID-19 検査対象に選ばれる。選ばれた場合、入国日の翌日の終了までに検査機関でテストを受けるか、自己検査キットによりテストを受ける。検査結果は 4 日以内に通知され、陽性だった場合は検査結果が出た日から数えて 10 日間の自己隔離が求められる。（入国後検査結果が出るまでの行動制限はなし。）
- 出発直前に COVID-19 陽性になった、あるいは濃厚接触者になった等で予定されていたフライトでの渡航ができなくなった場合は、1 週間程度出発を延期できる体制をとっているため、所定の連絡をし

て手続きをすること。(これについて、渡航に関しては委託旅行業者から一定費用はかかるものの予定されていた便から他便への振替が可能であること、また語学学校に最大1週間程度遅延してのスタートが可能であることを確認した。)

【カナダ滞在中】

- COVID-19 の症状が出た、あるいは陽性者との接触があった場合、寮の自室で自己隔離を行い、授業等には参加しない。
- 自己隔離中の生活は、寮スタッフによる食事・薬の手配、専用のトイレ・シャワーの使用等により支援される。
- 自己隔離中の学習活動はオンラインで限定的に参加可能である。
- 専門医の助言により、必要な場合は COVID-19 のテストを受ける。
- COVID-19 陽性の場合、症状が出始めてから 5 日後、解熱剤の服用なく解熱、その他の症状が緩和される等の条件が揃えば自己隔離を解除できる。
- COVID-19 陰性、あるいはテストを受けることが不要とされた場合は、症状緩和後に自己隔離の解除が可能である。
- 日本入国に関わる水際対策として、全ての入国者に対して出国前 72 時間以内の有効な検査による COVID-19 陰性証明書の提出が求められている。このため、滞在中指定された日時に COVID-19 の検査を受けた上で、陰性証明を MySOS というアプリに登録する必要がある。
- カナダでの自己隔離期間が帰国予定日を超える場合、引き続き寮に滞在するか、近隣のホテルが紹介される。(後に本学と委託旅行業者が相談の上、別途ホテルを確保して、滞在延長の場合はそちらに移動することとなった。また予定されていた便から多便への振替が可能であることは、出発時と同様委託旅行業者に確認をとっている。)

これ以降出発まで、参加者からの質問に適宜回答しつつ、それらをまとめたものにその他必要な案内を加えたメールを定期的に発信した。

4. 渡航・現地到着

出発日である 2022 年 8 月 6 日(土)はオミクロン株 BA.5 による第 7 波の真っ只中ということもあり、全員揃って出発できるかという点について相当の不安があったが、結果的には全員が無事に出発することができた。伊丹空港から成田空港を経由してカナダ・バンクーバー空港に到着後、入国審査・税関の手続きを経てカナダに入国した。ここで 7 月下旬から実施されているランダムでの COVID-19 PCR 検査に 12 名(含引率教員 1 名)中 4 名が選ばれた。これは事前に入手していた情報(ランダムで検査対象となるのは入国者の約 0.5%と言われていた)からするとかなり高い率であった。必要な手続きはビクトリア大学到着後にエージェントの支援を受けつつ行うこととして、引き続きフェリーにてビクトリアに向かった。ビクトリアの港に到着後専用バスでビクトリア大学キャンパスに向かい、滞在中寮にチェックインして、ランダム検査に選ばれた 4 名は翌 7 日午後 2 時から検査を受けるための手続きを行った。4 名が受けた検査の結果は 9 日に通知され、幸いにも全員が陰性であった。

7 日夕方の歓迎イベント Mix & Mingle の後、8 日(月)にプログラム開始となるため、参加者は約 1 日半、長旅の疲れを癒したり時差に慣れるなど、現地での生活に適応するために各々の時間を過ごした。

8 日以降、学生は午前中はレベルに応じた英語のトレーニングを受け、午後・夕方は毎日用意されているアクティビティへの参加、あるいは自由にビクトリア市街中心部を散策するなどして、言語・文化の体験を深めていった。引率教員は徐々に学生の自主性に委ねるように距離を置いていき、委託旅行者から提供されているコミュニケーションアプリなどを使って、学生の様子把握や質問への回答を行って、8 月 11 日まで現地に滞在した後に帰国した。その後に参加者 1 名が発熱して、COVID-19 ではなかったものの 1 週間弱寮の自室で隔離せざるを得ないという状況が発生したが、それ以外は問題なく研修は進行していった。

5. 帰国に向けて

8 月 24 日（水）からは復路引率教員が現地入りして、帰国に向けて必要な支援を行った。25 日には帰国に向けた PCR 検査を引率教員含め全員が受けたが、これは委託旅行者との調整の結果ビクトリア大学キャンパス内で受けられることとなった。検査結果は約 6 時間程度で通知され、全員が陰性ということで揃って帰国できることとなった。その日のうちに検査結果証明書の pdf ファイルを全員が受け取っていることが確認され、順次 MySOS に登録して、帰国に向けた準備が整えられていった。なお、結果的に不要であったものの、万が一帰国前の検査で陽性だった場合に生じる滞在延期に関わる費用、具体的には①ビクトリア大学学生寮から待機ホテルまでの移動費用、②待機期間中の宿泊代（ホテル代）、③帰国に関する航空機代（追加費用が発生した場合）、④PCR 再検査に関する費用は海外旅行保険でカバーされること、滞在延長期間のホテルはビクトリア市内で確保されていること、保険の申請は PCR 検査の結果書面で可能であること等が委託旅行者から学生に通知されていた。

8 月 27 日（土）の早朝に滞在していた寮を後にして、空路バンクーバー・成田を経由して 28 日（日）の夜に伊丹空港に全員揃って帰着して、研修は終了・解散となった。

6. 課題と今後の展望

結果的に 11 名全員が予定されていた研修を全て終えて帰国した。とはいえ、新型コロナウイルスという未知な点が多いウィルスを前に、完璧な事前準備・対応ができたわけではない。参加学生に対して研修後にアンケートを実施したところ、全体的に研修内容は満足という声が多かったが、改善を要する点を尋ねたところ、諸々の連絡がもう少し早めにもらえたらよかったという声が多く、これについては実施側の我々も大きな課題として認識しているところであった。この要因として、COVID-19 への対応が各国で刻々と変化する中で、必要な情報を収集して確実なものとして発信するのに時間がかかったということがある。前期研修については久々の短期研修実施ということと COVID-19 によるこれまではない対応が求められるということから、本学では実施する研修を最小限まで絞って実施した。これ自体は正解であったのだが、それでもなお後手後手の対応になってしまった部分があることは否めない。上述の通り、前期研修が実施された時期はオミクロン株 BA.5 の感染が急拡大しており、情勢が極めて流動的であった。今後と同じ程度の影響を及ぼす新型コロナウイルス変異株やその他の感染症が発生するかどうかを予見することはできないが、出入国の制限や渡航手続きが短期間で変更される情勢下において、確実な情報収集・共有が可能となる体制を構築することが重要であり、そのためのリソースが確保できない場合には研修実施を見送るという決断も視野に入れる必要があると思われる。

今後の展開について、本学グローバルセンター主催の 2022 年度後期短期研修については、本稿執筆段階の 2023 年 3 月時点において COVID-19 の感染状況は落ち着きを見せているものの、募集を行なっ

た 2022 年 10～11 月の段階では半年先の感染状況の予測が困難であったことから、アメリカ・ノースカロライナ大学ウィルミントン校の語学研修 1 つのみの実施にとどまった。とはいえ、出入国の制限や渡航手続きについては前期と比較するとかなり緩和・簡略化されており、9 名が参加した研修の実施はスムーズなものであった。2023 年度からは実施する研修の数も少しずつ増やしていく予定であり、2022 年度の経験をベースにしてより効果的かつ効率的な危機管理体制を構築した上で実施していくことになる。多くの学生が海外を体験することを希望する中で、いかに学生の安全を確保しつつ有益な体験を提供できるかが鍵となってくる。感染症対策を含めたこれからの危機管理のあり方への注視を続けつつ、学生の国際交流を支援していくことが重要である。

戸板保佑『乗除通変算宝』(1780 年)

城地 茂*

多文化教育系・グローバルセンター

1. 緒言

『関算四伝書』(戸板保佑(編)、1780 年)のうち「関算後伝」93 に『乗除通変算宝』¹(以下、乗除通変算宝本と呼称)がある。全 20 丁に表紙付きである²。「乗除通変算宝」3 卷³、「続古摘奇算法」2 卷、「田畝比類乗除捷法」2 卷である。つまり、これは『楊輝算法』の抜粋なのである。『乗除通変算宝』が全体の題名になっていることは、韓国の大学校⁴でもあることである。これは、日本の大学では、『楊輝算法』の名前もよく見られている⁵。

『楊輝算法』は、明代に入りソロバンの時代になると、1378 年(洪武 11 年)に杭州の勤徳書堂で再版された。ある意味で、『楊輝算法』は時代を先取りしていたと見るべきだろう。勤徳書堂本そのものは現存していないが、『楊輝算法』は李氏朝鮮の教科書に採用されたので、現在まで伝わったのである。ソロバンを使わない朝鮮で(算木による)計算技能を述べた『楊輝算法』が重宝されたのは、当然である。

2. 『楊輝算法』諸本

現存する『楊輝算法』木版本は、筆者の知る範囲では 8 書あり、いずれも 1433 年以降のものと考えられる。

『楊輝算法』(1275 年)(散逸)-勤徳書堂(1378 年)(散逸)-朝鮮重刊本(1433 年)(以下 7 本を現認)

- 1 日本・「宮内庁書陵部蔵本」⁶
- 2 日本・「筑波大学附属図書館本」A 本⁷
- 3 日本・「筑波大学附属図書館本」B 本(復刻本)⁸
- 4 日本・「尊経閣文庫本」⁹

本稿は、学術研究助成基金助成金基盤研究(C)21K00250「和算家とその数理天文学の研究」(代表・城地茂)の援助を受けたものである。

¹ 宮城県図書館古典籍類所蔵資料、『関算四伝書』(戸板保佑(編)、511 冊(存 507 冊、要伝 80~83 欠)安永 9 年(1780)写)のうち「関算前伝」「関算後伝」「関算要伝」「関算完伝」という 4 つの区分からなり、総称して「関算四伝書」と呼ばれている。現存する 507 冊が宮城県有形文化財(書跡・典籍)に指定されている。なお、該当部分は『関流和算書大成』第 5 卷(勉誠出版、2010 年)として復刻されている。本文では、これを利用した。

² このうち、1 丁は扉となっていて、全 19 丁が内容である。

³ 「算法通変本末」巻上、「乗除通変算宝」巻中、「法算取用本末」巻下。これを扉では「乗除通変算宝」「法算取用本末」としている。

⁴ 韓国・延世大学校学術情報院本(写本)、『通変算 附続古摘奇』として、『楊輝算法』の「乗除通変算宝」序文と「続古摘奇算法」(巻上下)が発見された(拙稿、(2020)『『楊輝算法』の関孝和写本と延世大学校本』、『大阪教育大学紀要』93: 43)。また、韓国延世大学校本(木版本)『算法通変本末』の名称で『楊輝算法』(00031046180-MF(고서귀)1550)が、韓国・高麗大学校図書館本(木版本)には『算法通変本末』で『楊輝算法』(대학원 貴 437)がある(拙稿(2018)「朝鮮木版本『楊輝算法』の考察-高麗大学校本版本の発見をふまえて」『数理解析研究所講究録』B69, 219-228.)。

⁵ 筑波大学本の書き外題には、2 本とも「算法通変本末 一名宋楊輝算法」とある。

⁶ 請求記号: 404・17。佐伯藩主・毛利高標(1755-1801)献上本。「楊輝算法」と登録されている。「咸山苗裔」「南宮氏厚」の印があるが、韓国の咸悅(全羅北道益山市咸悅邑)・南宮氏と関係があるかもしれない。

⁷ 請求記号: コ 200-2 100767138487。

⁸ 請求記号: コ 200-3 100767138494。

⁹ 請求記号: 4-29。

- 5 台湾・「国立故宫博物院・図書文献館本」¹⁰
- 6 韓国・「延世大学校学術情報院本」¹¹
- 7 韓国・「高麗大学校附属図書館本」¹²
- 8 韓国・「大韓民国宝物 1755 号本」(民間所有本、筆者未調査)¹³

となっており、各本、貴重なものである。

各本の印刷は微妙に異なるものもあり、少なくとも、延世大学校学術情報院本と筑波大学附属図書館本 A 本とは異なる版である。しかし、内容は全く同じであり、筆者が調査した 7 本ではいずれも『続古摘奇算法』に乱丁があるものである。¹⁴

『楊輝算法』の主な写本は、以下のようになっている。

- | | |
|--------------------|--|
| 1 富山県・射水市新湊博物館高樹文庫 | 関孝和 1661 年写本 |
| | 中田高寛 1773 年頃再写、石黒信由蔵本 ¹⁵ |
| 2 日本学士院 | 中田高寛→石黒準太郎 1913 年写本 ¹⁶ |
| 3 中国・自然科学史研究所 | 中田高寛→三上義夫 1917 年写本 ¹⁷ |
| 4 中国・浙江省立図書館 | 中田高寛→三上義夫→裘冲蔓 (1926 年頃) 写本 ¹⁸ |
| 5 広島県・安芸高田市歴史民俗博物館 | 中田高寛→三上義夫写本 ¹⁹ |
| 6 早稲田大学小倉文庫 | 中田高寛→学士院本→? 小倉金之助 (1885 年-1962 年) 写本 ²⁰ |
| 7 (京都大学?) | 中田高寛→? 藪内清蔵書本 ²¹ |
| 8 静嘉堂文庫 | 朝鮮重刊本→毛晋 (1598 年-1652 年) 写本 ²² →? 宜稼堂叢書 |
| 9 台湾・国立故宫博物院図書文献館 | 毛晋→『宛委別蔵』(嘉慶 (在位期間、1796 年-1820 年) 初年) 本 ²³ →? 宜稼堂叢書 |

¹⁰ 楊守敬 (1839-1915) が日本赴任の際 (1880-1888) に購入したもの。請求記号：故観 014105, 014106。

¹¹ Call No.고서(귀) 155 0, Barcode 000040302703。『算法通变本末』で登録。マイクロフィルムもある。

¹² 請求記号：大学院貴 437、登録番号 461524905。

¹³ 韓国の知り合い古書店が売買したものである。取得者の秘密保持のため詳細は不明。

¹⁴ これらの他に、平山諦 (1988)「朝鮮算書目録」『数学史研究』116: 57 には、李王家図書館に朝鮮復刻本らしい記録が残されているが、詳細は不明である。

¹⁵ コピー所有。

¹⁶ 学士院請求番号 7143。

¹⁷ 任継愈 (他編) (1993)『中国科学技術典籍通彙 (数学巻)』1:1045-1117 に収録されている。

¹⁸ 三上義夫が李儼に贈った写本の再写本で、『続古摘奇算法』巻上、巻下校正部分を使っている。宜稼堂叢書本とのこれらの百納本がある。請求書名『宜稼堂叢書；七種』、請求記号：普 081/4748。もう一部『諸家算法』の写本がある。請求記号『諸家算法及序記』、請求記号：普/1809。

¹⁹ ペン書きでの写本 20 頁。自然科学史研究所本と同じ間違い (「河図」「洛書」を取りちがえ) があることから、李儼に贈るために手元に残したものと考えられる。藤井貞雄 (2004)『三上義夫遺稿目録』:138、番号 65306。『続古摘奇算法』巻上の図などが描かれている。

²⁰ 請求記号イ 1601067。小倉金之助が 1937 年 9 月に写本したもの。改頁の位置が学士院本と同じなので、学士院本を写本したものと思われる。『続古摘奇算法』巻上などがある。

²¹ 不明本。中田高寛の癖字を真似て模写している。コピー本を上野健爾 (1945-) 氏より入手。

²² 甬宋楼旧蔵本、4 函 29 架。陸心源 (1834-1894) の蔵書を 1906 年に陸樹藩 (1868-1926) より購入したもの。上海・郁松年 (1821-1888) の宜稼堂の蔵書も多いので、『宜稼堂叢書』の原本と考えられる。宜稼堂には、蘇州・黄丕烈 (1763-1825) の士礼居の蔵書も多く、『宜稼堂叢書』を校正したのは黄丕烈であるので、この可能性は極めて高い。6 巻本、『続古摘奇算法』巻上欠。なお、『続古摘奇算法』巻下の「下」を白塗りで消しており故意に巻上を削除した可能性もある。

²³ 阮元 (1764-1849) が『四庫全書』に未収録の書籍を献上したもので『楊氏算法』3 巻となっている。「宛委別蔵」の名称は、中国・故宮 (紫禁城) 毓慶宮 (皇帝の読書室) 宛委別蔵室からきている。実は 6 巻本で乱丁部分も同じ事から、毛晋の写本を写したものと考えられる。6 巻本、『続古摘奇算法』巻上欠。請求番号：故善 010610-010612。

- 10 中国・自然科学史研究所 『諸家算法』²⁴ → 『続古摘奇算法』(巻上と巻下の各一部分)
 11 韓国・延世大学校学術情報院 不詳²⁵
 12 韓国・緑雨堂 未調査²⁶

3. 『乗除通變算宝本』

乗除通變算宝本の内容は、以下のようになっている。括弧の中は関孝和版の『楊輝算法』写本(以下、中田高寛(1739-1802)本と呼称)との違いである。つまり、括弧内は中田高寛本にあって、乗除通變算宝本にはない部分である、なお、太字のところは、一般に欠本となっている「続古摘奇算法」巻上の部分である。

(宋楊輝算法一)「乗除通變算宝」

(巻上) 習算綱目 [略] 諸家算書 指南算法 相乗六法
 単因 三角垛底面 四隅垛底面 每人給米 吉布
 重因 身前因 相乗
 重因 損乗 官支錢 商除二法

(巻中) 加術五法 減法(術) 四術 求一(乗法、除法)
 問題無し(九帰新旧題括) 問題無し(算無定法) 問題無し(無括揆数)

(巻下) 問題無し(代乗成術) 問題無し(代除成術)

(宋楊輝算法三)

「続古摘奇算法」巻上

縦横図 洛書 花十六図 陰図 右換易術 五五図 陰図(一部のみ)
 六六図 陰図 衍数図 陰図 易数図 陰図 九九図 百子図
 聚五図 (横九図) (八陣図) (連環図)
 剪管 用工不知其数 開方除不尽之数²⁷

(巻下) 二率分身 雉兔同籠 羅七尺綾九尺 「百鷄術」鷄翁鷄母鷄雛
 互換 応用算法 婦人河上
 盈不足 方田論
 九章句爰(股)(九章右句三股四弦五之率、無方五斜七之数)²⁸
 海島題解(図×2)

「続古摘奇算法」巻下 終

(宋楊輝算法二)「田畝比類乗除捷法」

(巻上) 直田 円田 畹田[図] 丘田[図] 牛角田[図] 環田
 圭田 勾股田 俊田 梯田
 箭田[図] 牆田[図] 圭垛[図] 梯垛[図]
 腰鼓田[図] 鼓田[図] 三広[図] 曲尺[図]
 環田 方箭 円箭 圭垛 小梯垛 大梯垛
 箭筈[図] 箭翎[図]

(巻下) 直田 截田 圭地 梯田

このように、一通り7巻の問題が一巡すると、以下、雑多な問題が以下のように並んでいる。表中の丁は、朝鮮復刻本の通りである。なお、「続古摘奇算法」上巻は、太字にしてある。

²⁴ 自然科学史研究所附属図書館蔵。一般公開はされていないが、「諸家算法及序記提要」に残されている(任継愈(編)(1993)、『中国科学技術典籍通彙(数学巻)』1:1429)。

²⁵ Call No.고서(I) 510 양휘 산, Barcode 000040302072。マイクロフィルムも閲覧可能である。『続古摘奇算法』のみ。

²⁶ 韓国・海南尹氏の旧居が緑雨堂である。韓国活字本の原本。楊輝(著)・車鍾千(編)(1275; 2006)『楊輝算法』教友社。朝鮮(韓国)語訳したものもある。

²⁷ 乱丁部。

²⁸ 乱丁部の前の部分、題名だけで問題は欠。

「続古摘奇算法」上 12 丁裏
「乗除通變算法宝」中 5 丁表
「乗除通變算法宝」中 7 丁表
「法算取用本末」下 3 丁表
「法算取用本末」下 8 丁表
「法算取用本末」下 11 丁表
「法算取用本末」下 11 丁裏
「続古摘奇算法」上 9 丁表
「続古摘奇算法」下 6 丁裏

「乗除通變算法宝」中 4 丁表
「乗除通變算法宝」中 6 丁表
「法算取用本末」下 3 丁裏
「法算取用本末」下 3 丁裏
「法算取用本末」下 10 丁裏
「法算取用本末」下 11 丁裏
「続古摘奇算法」上 8 丁裏
「続古摘奇算法」下 6 丁表

以上のように、問題や図の中は極めて簡単か、まったく省略されている。総ページ数も 20 丁しかない。

現在のように「一一如一」から始まるようになったのは、この『楊輝算法』と思われる。九九の表にはなっていない²⁹が、「算法通變本末」巻上「習算綱目」に「一一如一至九九八十一」とあるからである。

ここで注意を有するのは、問題の並び方である。これは、朝鮮復刻版の木版本の『楊輝算法』(以下、朝鮮復刻版と呼称)と同じ順番となっている。

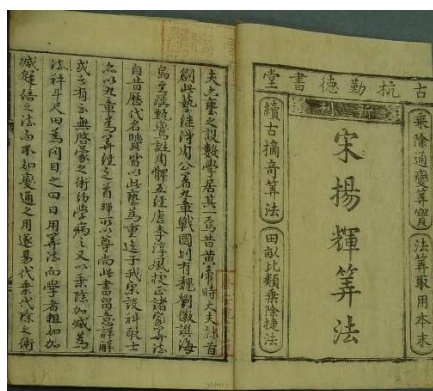


図1 朝鮮復刻版(木版本)『楊輝算法』扉³⁰

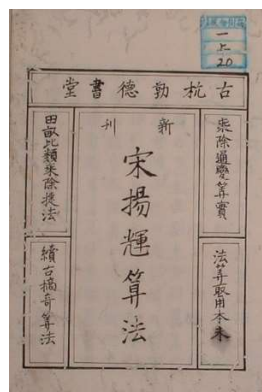


図2 関孝和の『楊輝算法』扉³¹

これに対して、富山県・射水市新湊博物館蔵書の『楊輝算法』(以下、中田高寛写本と呼称)は、「乗除通變算宝」「法算取用本末」(以上「乗除通變算宝」3巻)、「田畝比類乗除捷法」2巻、「続古摘奇算法」2巻となっている。

さらに言うと、乗除通變算宝本は、中田高寛写本の「続古摘奇算法」上下巻にある誤植の部分が、校正前のまま並んでいるのである。

また、五五図の1・2(右から1行目、上から2列目)は「十一」と正解が記されている。六六図の3・3は「廿三」、(六六)陰図5・5は「廿六」と正解が記されているものの、朝鮮版本でも間違えている6・2は「廿一³²」と間違えたままである。なお、残りの衍数図(七七図)の2・3は「卅八」と、(衍数)陰図の4・5は「卅九」と、5・7「卅四」と正解が記されている。九九図の2・5だが「四十三」と正解を記している。

²⁹ 九九の表としては『算学啓蒙』(朱世傑、1299年)が最初である(大矢真一(1980)『和算以前』:191)。

³⁰ 筑波大学附属図書館、中央貴重コ 200-2、10076713848。なお、10076713849も『楊輝算法』である(後刷本)。

³¹ 中田高寛(1739-1802)による写本、富山県・射水市新湊博物館蔵、一上 20,21,22。

³² 正解は廿二である。

図3 乗除通変算宝本4丁裏-5丁表

そうすると、乗除通変算宝版本の写本者（戸板保佑？）は、手元に7冊揃った朝鮮版本、もしくはそれに準ずる写本を見て写本を始めた可能性が高い。

これに対して、中田高寛写本は関孝和の修正本を手写本を始めた可能性が高いことになる。そうすると、山路主住のもとには『楊輝算法』は、最低2種類のものがあつたと考えるべきではないだろうか。

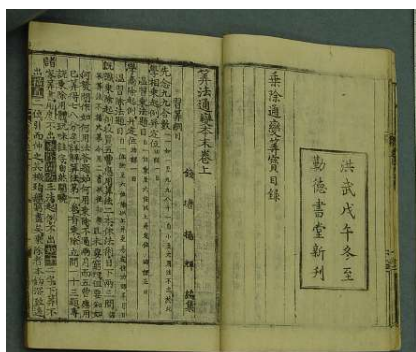


図4 朝鮮復刻本³³

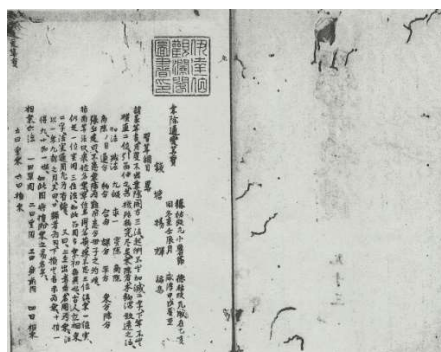


図5 乗除通変算宝本³⁴

4.小結

このように、関孝和以後も同様に、和算家・天文学者として発展した。関久之は詳細不明だが、山路主住は、最初は和算家として、後半は、天文家として大成していった。ただし、専門を変えたわけではなく、当時、和算家は天文家でもあつたのである。次の世代の戸板保佑は、天文家として名を馳せたが、それも和算家としての本分を忘れたわけではなかった。なぜなら、『関算四伝書』をまとめたのである。

ここで、乗除通変算宝本について、まとめてみよう。

- 1 朝鮮復刻版と同じ順番となっている³⁵。
- 2 中田高寛写本にある誤植の部分が、校正前の順番になっている。
- 3 六六陰図では、朝鮮版本でも間違えている部分は間違えたままである。

ここから、『楊輝算法』では、朝鮮復刻本と関孝和の校訂本（中田高寛本）の、最低2種類のものがあつたと考えるべきであるといったが、朝鮮復刻本の方は日本には最低4部が存在している³⁶。

³³ 筑波大学附属図書館本『楊輝算法』「算法通変本末」巻上一丁表。

³⁴ 宮城県図書館古典籍類所蔵資料、戸板保佑、1780年。岡本和夫・川原秀城・渡辺純成・佐藤賢一（編）（2010）『関流和算書大成-関算四伝書』第5巻。

³⁵ 「続古摘奇算法」上12丁裏の問題だけが異なっている。なお、これは中田高寛本の校正とは別物である。

³⁶ 筑波大学附属図書館に2本の他に、宮内庁書陵部蔵：請求記号404-17、尊経閣文庫：請求記号4-29の4本が確認されている。

ところが、関孝和の校訂本は、現在までのところ発見されていない。中田高寛は、どこで見たのだろうか？

まず、その他の書籍³⁷の筆跡からも、『楊輝算法』は中田高寛の写本であることが分かる。中田高寛は、1773年より江戸に出府し、山路主住（1704-1772）、山路之徽（1792-1778）、藤田貞資（1734-1807）らに師事し、1779年、藤田貞資に印可を授けられて、富山に帰っている。

しかし、中田高寛は、隣の富山藩の藩士である。富山藩³⁸は、加賀藩の支藩であるが、中田高寛は、足軽³⁹であったため、本藩の文庫である尊経閣文庫本を閲覧できる可能性は極めて低い。したがって、本家である加賀藩の尊経閣文庫に残されている『楊輝算法』を写本した可能性より、関流算学塾で写本した可能性が高い事が分かる。したがって、1773年から1779年の間に関流算学塾で写本したと考えられる。

ここで、戸板保佑の写した『関算四伝書』を見てみると、藤田貞資を見ると、数多くの写本が残されている。なお、数字の部分は、関算の順序を表しており、「乗除通変算宝」をそのなかに入れている。

関算前伝

39 堦量招差解（藤田貞資写）

41 統術招差（藤定賢著 貞資写）

関算後伝

11 得幸録答術（貞資自筆）

12 得幸録改術（貞資自筆）

62 堦底術（藤田貞資）

64 菱偏三円（藤定賢編）

66,67 額文算 2 卷（貞資自筆）

88-92 算法集成附録 5 卷（藤田貞資）

93 乗除通変算宝（宋⁴⁰）

関算完伝

9,10 綴術詳解 2 卷（藤定賢）

21 算脱解義（定賢）

32 堦変術（定賢） 33 索術再後（定賢編）

61-63 変商 3 卷（定賢編）

このように、藤田貞資の蔵書の可能性は低そうである。

残された可能性は、山路主住、山路之徽の親子の線である。可能性の問題として、天文家の船山輔之（1738-1804）を挙げておきたい。

船山輔之は、宝暦 13（1763）年正月 11 日、戸板保佑より中西流の免許を受けた。そして、安永 5（1776）年の冬に、山路之徽は船山輔之に別伝、印可、一子相伝の免許を授けている。

また、山路之徽は安永 6（1777）年、つまり没年の前年に、戸板保佑に印可免許を授けている。そうになると、山路之徽は戸板保佑には、楊輝算法（木版本）しか貸し出さなかったと考えられるのではないだろうか。そして、船山輔之にのみに貸し出したと考えるのは考えすぎだろうか。少なくとも戸板保佑の『関算四伝書』には関孝和の校正は伝わっていなかったのだから。

また、時代区分で言うと、1780 年の『関算四伝書』の成立と 1782 年の『天文四伝書』の成立は、地

³⁷ 例えば、日本学士院蔵、『解見題之法諺解、正商之題図象一十六品』（1781 年、藤田定資撰、中田高寛識）請求番号 861 は、中田高寛の直筆であるが、筆跡が一致している。

³⁸ 加賀金沢藩二代目前田利常（1593-1658）の二男の利次（1617-1674）が、1639年に分封されて成立。後に10万石となる。富山城主。

³⁹ 俵 14 俵であった（日本学士院（編）『明治前日本数学史』vol.4:449）。

⁴⁰ 「徳祐改元（1275 年）小暑節、徳祐改元歳在乙亥（1275 年）、同冬至（1275 年）壬辰月（日の誤）、咸淳甲戌（1274 年）夏至」とある。いずれも南宋の年号で、「乗除通変算宝」「法算取用本末」（「乗除通変算宝」3 卷）、「続古摘奇算法」「田畝比類乗除捷法」の成立年である。

方和算期・紅毛算期に区分できそうである。大きく世間に広めたいという役割からも、明らかに関孝和との時代区分には合わないからである。

今回はできなかったが、今後は、船山輔之の調査を進めたい。

Abstract

An analysis of the newly discovered historical material, *Chengchu Tongbian Suanbao*, (乗除通變算宝) is *Yang Hui Suanfa* (楊輝算法), led to the following conclusions.

1 The order is the same as the Korean re-print version.

2 The typographical part in the Takahiro Nakata manuscript is in the order of proofreading.

3 In the “six-six-shadow book”, the mistaken part in the Korean version of the book remains wrong.

From these, it should be considered that there were at least two types of *Yang Hui Suanfa*, a Korean reprint and a revised book by Takakazu Seki (関孝和), Takahiro Nakata’s manuscript.

Looking at Yasusuke Toita's (戸板保佑) *Seki San Shidensho*, (関算四伝書) at the name of Sadasuke Fujita, (藤田貞資) many manuscripts of him are left. Therefore, it is highly possible that it is not in the collection of Sadasuke Fujita. Then, the possibilities left are Nushizumi (山路主住) and Yuki Yoshi Yamaji (山路之微). As a matter of possibility, I would like to mention the astronomer Sukeyuki Funayama (船山輔之).

表 1 日本数学史・天文学史の時代区分

大区分	中区分	小区分	年代	事項	通説
和算時代	律令格式時代「古代」	律令期	554- 730	暦博士来日	古代
		格式期	731-1246	『周髀算經』重視格	
	和算時代「近世」	前和算期	1247-1673	『数書九章』の成立	中世
		和算期	1674-1780	『発微算法』刊行	
		勘定方 和算期 じかた 地方和算期・ 紅毛算期	1781-1876	『精要算法』刊行 (1780)『関算四伝書』 (1782)『天文四伝書』	
洋算時代			1877-	東京数学会社の設立	近代

5.参考文献

- [1] 日本学士院（編）（藤原松三郎）（1954;1979）『明治前日本数学史』5 卷、岩波書店、野間科学医学研究資料館。⁴¹
- [2] 日本学士院（編）（1960;1979）『明治前日本天文学史』岩波書店、野間科学医学研究資料館。
- [3] 児玉明人（1966）『十五世紀の朝鮮刊銅活字版数学書』富士短期大学出版部。
- [4] 渡辺敏夫（1986-7）『近世日本天文学史』2 卷、東京：恒星社厚生閣。⁴²
- [5] 平山 諦（1992）「戸板保佑の一代記」『数学史研究』132: 1-5。
- [6] 平山 諦（1988）「朝鮮算書目録」『数学史研究』116: 53-57。
- [7] 任 継愈（他編）（1993）『中国科学技術典籍通彙』「数学卷」5 卷（郭書春（他編））鄭州:河南教育出版社。

⁴¹ 日本学士院（編）（藤原松三郎）（1957; 1983）『明治前日本数学史』第 3 卷、pp.263-306 に戸板保佑の記述がある。

⁴² 巻下に「仙台戸板家の測量所」がある。

- [8] 城地 茂 (2005; 2009) 『日本数理文化交流史』 台北:致良出版社.
- [9] 城地 茂 (2009) 「関孝和と山路主住の接点-「甲府城内御金紛失役人御仕置一件」にみる関家断絶」
『(京都大学) 数理解析研究所講究録』 1513, 78-90.
- [10] 城地 茂 (2018) 「朝鮮木版本『楊輝算法』の考察-高麗大学校木版本の発見をふまえて」『(京都大学) 数理解析研究所講究録』 B69, 219-228.
- [11] 城地 茂 (2020) 『楊輝算法』の関孝和写本と延世大学校本」、『大阪教育大学紀要』 69: 41-51。
- [12] 城地 茂 (2022) 「関孝和と山路主住・戸板保佑 -『乗除通變算宝』の成立」『グローバルセンタ
ー年報』 26:13-22.
- [13] 東アジア数学史研究会 (編集) (2008-11) 『関流和算書大成-関算四伝書』 11 卷、勉誠出版.

教職志望者のグローバルな視野を養う
日タイ大学生国際交流プログラムの実践及び効果に関する考察

王林鋒
高度教職開発部門特任准教授

浅井温子
学術連携課国際室国際交流係

1. プログラムの背景及び概要

日本の公立学校においては、ダイバーシティ教育が求められる中、日本語を母語としない児童・生徒の増加と共に、多様性を配慮した教育指導を担う教師がグローバルな知見と実践的指導力を必要とされる場面が増加しつつある現状に対して、大学における教員養成のプログラムが十分対応されていない（岩田、2018）。岩田（2014）は、教員養成系大学が行なっている国際交流プログラムが語学力の強化に偏り、教員養成の要素が乏しいことを指摘している。また、百合田・香川（2016）が行なった調査では、教員養成課程の学生の異文化意識の低さが見られた。従って、教員養成系大学の教員養成課程の学生に向けて、海外の教育事情とその背景も含めて、現地の学校現場から実践的に学ぶことを企画したプログラムが必要となる。その一つの試みは、日タイ大学生国際交流プログラムである。

日タイ大学生国際交流プログラムは、主に教員を志望する学生を対象に日本（東京学芸大学・大阪教育大学）およびタイ（コンケン大学）の学生による双方向の学生交流を通じて、グローバル化が進む教育現場において必要とされる実践的な指導力を養成することを目指している。今回のタイ王国への短期派遣プログラムは、日本での事前学習を終え、実際にタイの多様な教育現場に触れることで、教育の現状について理解を深め、教育課題を広い目で捉えることを目的として実施された。

2. プログラムの実施

2.1 事前学習

海外の教育現場について実践的に学ぶことをテーマとしている日タイ大学生国際交流プログラムにおいて、現地での理解をより深いものにするために事前学習が計6回（10月～12月）行われた。主にタイの教育や文化についての学習や自国の状況の捉えなおしを行うことで、学校・教育をグローバルな観点から重層的・構造的に理解することを促すものである。

事前学習では、タイという国を知るために学生たちは文献や参考資料を読み、それぞれが考察を加え、講義時には各考察に対する説明等が担当教員から述べられた。内容としては、多岐にわたるタイについての観点が紹介され、宗教、王室、軍、階層社会・権威主義等の政治的や文化的背景をもとに、タイの教育現場をとらえていくものである。さらに、国際課スタッフによる渡航ガイダンスも事前学習とは別途実施され、実際に現地に赴いた際にタイの生活で注意すべきことなども伝えられている。

表 1：事前学習の内容

日時（2022 年）	内容
第 1 回（10 月 21 日）	オリエンテーション（タイという国・文化・教育）
第 2 回（10 月 28 日）	タイと日本の関係（日本人社会、日本人学校）
第 3 回（11 月 14 日）	中間まとめ①（英語教育の問題、タイの教師等）
第 4 回（11 月 24 日）	タイの教育（1）主に高等教育と教員養成
第 5 回（12 月 2 日）	タイの教育（2）主に基礎教育と地域格差
第 6 回（12 月 6 日）	中間まとめ②（タイの学校と教師、教育課題等）

2.2 現地での学習

タイへの派遣プログラムは、7 泊 8 日のスケジュールで行われている。具体的活動として表 2 のとおりである。

【第 1 日（12 月 11 日）】

集合場所は、タイ・バンコク・スワンナプーム国際空港とし現地集合である。その後、国内線にてコンケンへ移動し、本プログラムで学生交流を行うコンケン大学担当スタッフの付き添いのもとバンにて宿泊施設に到着。

【第 2 日（12 月 12 日）】

コンケン大学の学生とともに、Wat Thung Setthi(寺院)を訪問。その後、コンケン大学にて教育学部日本語教育学科の学生との交流があり、主に土器制作・グループワーク・ムエタイ体験が行われた。タイと日本で出身国は異なるが、教育学部という同じ領域に興味・関心を持つ学生同士であるため、打ち解けることも早く、またグループワークで互いに言葉を教え合うことを通じて、より交流を深めている様子であった。

【第 3 日（12 月 13 日）】

コンケン大学附属小学校とコンケン内にある公立小学校（Samliam Municipal School）へ訪れた。日本語の授業やタイの伝統的な楽器を演奏する音楽の授業などを見て回り、学生たちも現地小学生と交流を行った。

【第 4 日（12 月 14 日）】

コンケン大学教育学部長と意見交換および質疑応答を行った。また、コンケン大学附属自閉症インクルーシブ教育研究開発センターへも訪問し、学生たちは日本でも取り入れられそうな工夫が沢山あると感想を述べていた。午後からは空路にてバンコクへ移動した。

【第 5 日（12 月 15 日）】

幼稚園と小学校が一体になっている Wat Hua Lamphong School へ訪問。この学校では、授業見学・現地小学生との交流などを行った。現地小学生との交流では、学生たちが事前に準備した折り紙とダンスで、言葉の通じない小学生に対して手本をしっかりと見せてあげるなどし、みんなが楽しめるよう工夫をしていた。

【第 6 日（12 月 16 日）】

チュラロンコン大学附属小学校とバンコク日本人学校への見学を行った。チュラロンコン大学附属小学校では学生が登校する様子から見学し、学校で注力しているカリキュラム

についても説明を受けることができた。また、バンコク日本人学校にも訪れ、授業見学をした。その後、バンコク日本人学校で勤務している教員の方々との懇親会もあり、学生たちは実際に外国で教育に携わっている先輩方の声聞くことができた。

【第 7 日（12 月 17 日）】

学生たちは、タイの教育と文化に関する考察をテーマに、各自グループに分かれ自主研修を行った。この自主研修での「発見」、「気づき」および「考察」については、帰国後の事後学習としてグループごとに発表した。

【第 8 日（12 月 18 日）】

学生たちは第 7 日で行った自主研修レポートを各自担当教員へ提出し、グループごとに設けられた教職員とのミーティングで、自主研修の省察等を行った。その後は各自帰国とした。

表 2:活動スケジュール

2022 年度日タイ大学生国際交流プログラム	
第 1 日	タイ・コンケン到着
第 2 日	コンケン大学にて学生交流 (ワークショップ、教育学部日本語教育学科学生との交流、ムエタイ体験等)
第 3 日	コンケン大学附属小学校、Samliam Municipal School（公立学校）訪問
第 4 日	コンケン大学教育学部長との意見交換および質疑応答 コンケン大学附属自閉症インクルーシブ教育研究開発センター 訪問 バンコク到着
第 5 日	チュラロンコン大学、Wat Hua Lamphong School 訪問
第 6 日	チュラロンコン大学附属小学校、バンコク日本人学校 訪問
第 7 日	自主研修
第 8 日	自主研修レポート提出 帰国

3. 学生の参加志望動機及び発表から読み取れた学び

まずは、学生 3 人の参加志望動機が表 3 のように書かれた。学生 A の志望動機は、日本の学校に在学中の外国にルーツのある子どもの理解を深めるため、国際的な幅及び教育の捉え方を持つことである。学生 B は、学校見学を通して、知識を増やし教育に対して自信をつけることと、異文化交流を通してコミュニケーション力を高めることで、理想の教師像に近づけると考え志望した。学生 C は、自分の異文化経験から海外の教育に興味を持つことになった経緯があった。それぞれの学生の志望動機が異なるが、教員としての力量形成を目指すことが共通している。これは、教育系大学の国際交流プログラムの特徴とも言える。そして、特定の国に興味を持つことより、海外の教育者たちや学生同士と交流す

ることで、コミュニケーション能力を身につける体験が期待されることが分かった。

表 3：参加学生の志望動機

学生	志望動機の抜粋（著者による編集）
A	①タイの学校現場、教育制度そして教員と児童・生徒の関わりの様子に触れることで、日本の学校に在籍する外国にルーツのある子どもの理解を深めたい：どんな信条や事柄が大切にされる国で育ち、そしてどのような教育システムを受け入れながら育ってきたのか、そこから日本にやってきているのか、そこに教員の立場である自身も身をもって踏み込む姿勢を探る。 ②タイの現行の教育制度、そしていかなる授業が行われているのかについて学びを得ることで、自身の授業者としての在り方に国際的な幅を持たせたい：国によって、どのような生徒像を抱いているのか、「教育」の捉え方が異なるかと自身の授業実践者としての姿勢を見つめる。
B	①一週間に二都市で複数の学校を見学できることを活かし、タイの基本的な教育を知り、日本とタイ間や都市間による違いを比較したい。さらに日本人学校の特徴や学習環境、日本内の学校との違いに着目したい。日タイの教育の抱える問題点や特徴などを学びたい。 ②関係性を構築するためにコミュニケーション能力を身につけたい。タイや東京学芸大学の方との交流で、自分の能力を自覚し高める機会にしたい。また、初めて外国の方と一緒に過ごす期間になるので、文化の違いを感じて新しい視点や考え方を得たい。
C	高校時代のオーストラリアでの短期交換留学や、ブラジルからの留学生と共に過ごしたホームステイ生活で、日本とオーストラリアの教育方法の差異や課題に対する考え方の違い、日々交流する中で文化の違いに触れた。他の国の教育にはどのような特色があるのだろうかと思うようになり、今回の日タイ派遣では、コンケン近郊の学校やバンコク日本人学校、チュラロンコン大学附属中学校の学校訪問に参加したり、チュラロンコン大学やコンケン大学の学生との交流に参加することで、教育に対する知見をより深め、将来教員になったときの糧にすることができると考え応募した。

2023 年 1 月 23 日に日タイ学生交流派遣プログラムのまとめと振り返りがオンラインで行われた。グループごとにタイの教育と文化に関する考察をテーマにして、メンバー全員の「発見」または、「気づき」と「考察」を含むこと、事前指導で学んだこと、実地に見て学んだこと、その後に考察したことの三者を含むこと、単発の「発見」「気づき」だけでなく、構造的な考察（背景、地域差、日タイ関係等々）を加えることが指示された。ここでは、本学の参加学生 3 人が入っているグループ発表の様子を基に彼女たちの学びを読み取ることを試みる。

学生 A のグループは、インタビューを基にタイに住む日本人の教育観をテーマとし、次の省察を行った。事前学習でタイの教育に触れたが、実際に現地に行ったことで「規律正しい学校生活、資金による授業内容の差、自律性・専門性の高い教師」を強く感じられた。バンコクにある世界最大規模の日本人学校の課題の一つが教員の任期制にあり、入れ替わりが激しいことから学校文化の継承や教員間の連携に支障が来うことが言える。そして、日本人学校は、日系企業による経営理事会で経営されており、教育専門家の不在による学校経営が懸念された。自主研修では、ショッピングセンターにあるスーパーでタイ在住日本人の子供たちが通う学校の実態調査を行った。その実態調査を通し、日本人学校、現地校、インターナショナル校を選ぶ際のリアルな声がわかった。そして、タイの街中のコンビニ、日用品、自動車、娯楽に日本文字・日本文化が潜んでいることが実感できた。学校外でインタビューを行った経験からコミュニケーション能力を鍛えられた。

学生 B のグループは、比較から見えるタイの文化と教育をテーマにした。学生たちは事前学習で触れた絶対的存在の国王や仏教国が現地のあらゆる所で実感できることを、写真を用いて報告した。さらに、タイは上座部仏教と日本は大乗仏教といった異なる流派の特徴や目指す方向などについて整理をなした。学校訪問では、タイでの外国語教育に注目をあて、次のようにも発表した。特に大学附属小学校だけではなく、公立小学校も日本語教育が行われている。バンコクに中国語と英語のバイリンガルの教育を行う公立小学校にも訪問した。タイの第 2 外国語が原則として中学校から始まっている。中等教育機関での第 2 外国語教育を担う教員養成課程が大学の教育学部に設置されている。特にタイの日本語教育事情が整理され、そのニーズの背景にある要因も考察されていた。また学生たちから加えて次のとおり発表もあった。時間割や開設科目からスキル教科の重視、ボーイスカウトの普及、キャリア教育といったタイの教育の特徴も見られた。今回の学校訪問では、タイの教育実習生の授業参観もできた。1 年間の実習期間中に一人の教育実習生が週 8 時間授業実践を行うといった教育実習のあり方の相違にも気付かされた。

学生 C のグループは、タイの教育と文化に関する考察をテーマとし、次の発表を行った。事前学習では、タイでの英語教育について学び、日常生活や教育における英語の必要度が低く、英語ができなくても高い社会的地位に付くことができる。実際に公園にいるタイ人の言語意識をインタビューを行った。「英・中・日のうち、最も親しみのある言語」を聞いた所、20 人中 19 人が英語に親しみがある、「日本語を目にする頻度」の質問に、45% の人が週に 2 回以上日本語を目にしている答えであった。そして、日本語が第 2 外国語として位置づけた理由を日系企業の進出に関連づけながら探った。また、タイは、日本と同じく植民地されたことがなく、独自の学校システムが構築されていて、独自のカリキュラムも守られた。事前学習のテキスト「王室と不敬罪」によると、タイは政治の不安定さ、政体の不動性が共存していて、タイ式民主主義が発展してきた。

4. 運営実務に関する考察

4.1 プログラム企画の良さについて

8 日間のプログラムの中で、都市部や地方、附属学校や公立学校、加えて日本人学校など多様な学校を訪問できたことが、学生にとって教育課題について広い目で捉えるという

学習のためにも、今後の進路等を考えるうえでも貴重な経験になったと考えられた。また、歓迎会やナイトマーケットへの参加などについても時間が設けられており、学校訪問と文化研修・学生交流もバランス良く取り入れられていたため、学生たちは良く学び、また文化についてもコンケン大学の学生たちと共に楽しく学ぶ機会が多かったように感じられた。

渡航に際しても、学生には現地集合・現地解散で、プログラムに参加してもらったため、メリットとして、前泊・後泊ができるなど学生の自由度が高い分、現地の知人に会ったり、事前に現地の様子を知れたり等プログラム以外での学びや体験ができることが多かったように思う。事務としても航空券手配の業務がないので、業務の負担が減った印象があった。ただし、参加人数が多くなった場合は、遅延やその他トラブルに備え、特に対応策を考えておく必要があると感じた。（引率者数を 2 名以上とし遅延者対応できる教職員を必ず準備する・迷った際に必ず集合できる場所を決めておく等）

4.2 現地校や関係者のコーディネートについて

本プログラムでは、東京学芸大学や現地校の教職員の様子を身近に見ることができ、現地校やプログラム関係者のコーディネートの仕方について、多くの学びがあった。

はじめに東京学芸大学の教職員からの学びとして、学生たちが授業見学をしている時間などもうまく用いて、次の予定等について現地担当者と相談されていた点が挙げられる。多くの現地校が受入に協力をしてくれたことは、この密にコミュニケーションを取り、プログラムや学校間の関係が持続するように話をされている様子からうかがえるのではないかと感じた。加えて、東京学芸大学の担当教員と事務員との連携については、担当教員が主導となりプログラムを実施、事務的なサポートを 2 名が行うというように役割がはっきりと分かれており、スムーズに取り運びがなされていると感じた。スケジュールについては、今までの経験も踏まえて学生の体調を配慮しプログラムの後半には予定を詰めすぎないように設定するなどの工夫がなされていた。自主研修の行動範囲や移動方法などについても学生の様子を見て決定するなど、学生が安全かつ窮屈せず自主的に動けるようにアレンジされており、学生への対応のバランスの良さが感じられた。このようにコーディネートされたプログラムを著者も体験することで、著者が想定していた以上に”大学生”だからこそ、学生自身でできることが多い印象を持てた。危機管理等については徹底することは重要であるが、学生ができることについては、コントロールしすぎないことも、本プログラムを通し重要だと感じた点である。

また、訪問先のコンケン大学の受入れに関するコーディネートも、参考になった。その理由として、コンケン大学へ訪問した際、東京学芸大学と大阪教育大学以外の他大学からの訪問があったにも関わらず、限られた人員の中で本プログラムへ手厚いサポートをしてくれたことためである。この対応は事務員 1 名が終日、本プログラムに付き添ってくれていたこともあるが、各対応について多くの教育学部日本語教育学科の学生が案内・説明・通訳をしたり、各施設ではその施設の担当者が来訪者の対応するなど、大人数を招待するうえでうまく人材を活用しながら運営しているからではないかと感じた。

4.3 引率を通しての学び

本プログラムを通して、著者は東京学芸大学の教職員と長期間交流を持つことにより、業務に関する情報交換や相談等を行うことができた。また、著者自身が渡航することで、引率時の渡航準備から帰国までのイメージを具体的に掴むことができ、以下のような学びがあった。

事務全般業務については、東京学芸大学事務担当者と主に業務の効率化や危機管理などについて意見交換を行った。業務の効率化については、東京学芸大学では学生からの申込や情報をデータで集めて整理し、紙媒体ではなくデータ上で業務を完結させるような効率化を図っているとのことであった。また、コミュニケーションツールについては、大阪教育大学では Teams を主に使用しているので、この点については迅速に行えている印象があった。危機管理については、本学と同様に渡航前に海外危機管理セミナーを行っているとのこと、内容について大きな差異はみられなかった。ただ今回のプログラムに際し、東京学芸大学はタイへ2回程は事前に渡航し、下見しているとのこと、現地の状況把握はしっかりと行っていた。

日タイ大学生国際交流プログラムでの引率を通して、主な本プログラム派遣時における確認事項についても再度整理することができた。本研修においては特に、日々価格が上昇する航空券の予約については学生たちにも速やかに予約の完了をしてもらうように呼びかけること、学生の基本情報を事前に確認しておくこと、授業の欠席連絡についても学生自身から事前に担当教員に連絡してもらうなどが必要な準備として挙げられる。また、入国手続き・新型コロナウイルス感染症罹患時の対応・海外旅行保険・各種書類・訪問先への手土産についても、事前に東京学芸大学と調整のうえ進めていくことが必要である。

5. 考察

本プログラムでは、都市部（バンコク）や地方（コンケン）の小中高学校のみならず、バンコク日本人学校等多種多様な学校へ訪問し、教育現場の実際に触れることができた。そのため、各校を比較しながら学習できることで、発見や気づきなどが多かったという意見があった。そして、参加学生の体調管理を配慮したため自主研修の時間を設けたが、各グループがそれぞれの問題意識を持ち、調査・検証方法を自ら考えて、街にインタビューしに出かけたことが主体性を発揮できた活動だった。

東京学芸大学の学生もいる通常とは異なる環境での学習や共同生活が刺激になり、学習面以外の成長もあった。具体的には、普段の生活では大学や実習先のことについて考えることが多く視野が狭くなっていたが、他大学で学年も違う学生やタイの現地学生との交流を通じて、楽しく学ぶことの大切さに改めて気づいたという学生もいた。バンコク日本人学校で働く東京学芸大学の卒業生との交流もあり、今後の進路について選択肢が広がった学生もいた。

また、引率した教職員にとっても本プログラムでの他大学との交流および海外渡航の経験は、教職志望者のグローバルな視野を養うためのより良いプログラムを実施するうえで参考になる点が多く、学生ともに日タイ大学生国際交流プログラムが有意義なものであった。

参考資料：現地での活動の様子



コンケン大学教育学部
日本語教育学科学生との交流



コンケン大学附属小学校授業見学



Samliam Municipal School での授業見学



コンケン大学教育学部長との
意見交換の様子



Wat Hua Lamphong School 学生との
交流の様子



チュラロンコン大学付属小学校訪問

参考文献

- 岩田康之(2014)「『教員養成教育のグローバル化に関する調査』の概要」東京学芸大学重点研究費「グローバルな視野を育成する教員養成プログラムとその運営のあり方に関する開発研究」報告書,pp.3-5.
- 岩田康之(2018)「日本の教員養成系大学における短期海外研修プログラムの企画・実践・効果に関する考察」『日本教師教育学会年報』27, pp.134-144.
- 百合田真樹人・香川奈緒美(2016)「教員養成課程のグローバル化の実践と評価」『日本教育大学協会研究年報』34, pp.153-166.

令和4年度 活動報告

留学生教育部門

部門長 米澤千昌 特任講師（多文化教育系グローバル教育部門）
副部門長 李址遠 特任准教授（多文化教育系グローバル教育部門）
安達智子 教授（総合教育系教育心理学部門）
石橋紀俊 教授（多文化教育系グローバル教育部門）
井上博文 教授（多文化教育系国語教育部門）
碓田智子 教授（健康安全教育系健康安全科学部門）
櫛引祐希子 准教授（多文化教育系グローバル教育部門）
櫻澤誠 准教授（多文化教育系社会科教育部門）
城地茂 教授（多文化教育系グローバル教育部門）
中山あおい 教授（多文化教育系グローバル教育部門）
水野治久 教授（高度教職開発系高度教職開発部門）
望月久稔 教授（理数情報教育系理数情報部門）

1. 留学生教育部門会議の実施

留学生教育部門では、本学で学ぶ留学生のための日本語・日本事情教育、生活・就学支援、受入れ促進、受入れプログラムの開発等に係る業務を行っている。今年度は非正規留学生ワーキング、正規留学生ワーキング、宿舍ワーキング、奨学金ワーキングの4つのワーキングに分かれて業務にあたった。部門全体会議は、2022年度はオンラインによる会議を4回、メールによる審議を1回の計5回行った。

- (1) 令和4年4月8日（金）
- (2) 令和4年6月9日（木）
- (3) 令和4年7月27日（水）
- (4) 令和4年12月8日（木）
- (5) 令和5年2月6日（月）～10日（金）メール審議

2. 受入れプログラム

本学では、学部留学生、大学院留学生以外にも、研究生（私費・国費）、研究留学生（国費）、交換留学生、日本語・日本文化研修留学生（以下、日研生）、教員研修留学生（以下、教研生）の受入れを行なっている。ここではグローバルセンターが大きく関わっている交換留学生、日研生、教研生のプログラムについて説明する。

2.1 交換留学生

本学と学生交流協定を結んだ海外の大学に在籍している学生が、1学期間、または1年間交換留学生として本学に留学している。2021年度は新型コロナウイルス感染症による

影響で、前期・後期ともに新規入学の交換留学生はいなかった。2022年度前期は18名の申請があったが、渡日できる時期が不透明であったため、オンラインで授業を提供することが決定した。その結果、7名が後期に留学を延期、4名が留学を辞退したため、7名の交換留学生を受入れることとなった。前期に受入れた7名の交換留学生のうち3名は学期途中で渡日できたが、前期はずっとオンラインで授業を実施することが決まっていたため、一部のハイブリッド対応授業を除き、渡日後もオンラインでの授業参加となった。学期中に渡日できなかった4名はずっと母国からオンラインで授業に参加し、そのうち2名は留学期間が半年であったため、一度も日本に来ることなく本プログラムを修了した。後の2名は後期が始まる時期に合わせて渡日した。

後期は、2022年度前期から1年間留学する5名に加え、22名の新たな交換留学生が渡日し、対面での交換留学プログラムが再開した。27名の交換留学生のうち16名が日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（双方向）の奨学金を受給した。

（2022年度前期）

ベトナム	2	7名
中国	2	
ドイツ	1	
大韓民国	1	
台湾	1	

（2022年度後期）

ドイツ	5	27名
大韓民国	5	
ベトナム	5	
台湾	4	
フランス	2	
アメリカ	2	
スイス	2	
キルギス	1	
クロアチア	1	

2.2 日本語・日本文化研修留学生

日本政府（文部科学省）奨学金留学生として、日本の大学において1年間、日本語能力及び日本事情、日本文化の理解の向上のための教育を受ける外国人留学生^{*1}の受入れも行っている。2022年度は11名の日研生を受入れた。大使館推薦が7名（うち、日系人枠が2名）、大学推薦が4名である。大学推薦の推薦枠は5名あり、2022年4月に面接試験を行い、推薦者を決定した。

大使館推薦	ベトナム	1	5名
	ブラジル	1	
	ロシア	1	
	インドネシア	1	
	大韓民国	1	
大使館推薦 （日系人枠）	ブラジル	1	2名
	メキシコ	1	

¹ 引用元：文部科学省「2022年度 日本政府（文部科学省）奨学金留学生募集要項 日本語・日本文化研修留学生」https://www.mext.go.jp/content/20211209-mxt_gakushi02-000019355-01.pdf（2023年3月18日アクセス）

大学推薦	ベトナム	3	4 名
	中国	1	

2.3 教員研修留学生

本学では、諸外国の教員であり、日本の大学において学校教育に関する研究を行う日本政府（文部科学省）奨学金留学生（教員研修留学生）※²を受入れている。2022 年度は JASSO 大阪日本語教育センターと大阪大学国際教育交流センターで半年の日本の予備教育を修了した 11 名と 2021 年度後期に直接配置で受入れた 1 名の合計 12 名が在籍していた。本来であれば、12 名全員 2021 年後期に渡日し、予備教育を受けたり、直接配置で本学での研究生生活を始めたりするはずであったが、コロナ禍の影響で 2021 年秋に渡日することができなかった。2022 年度が始まってからも、渡日できない教員研修生が 2 名いたため、この 2 名の教員研修生には、オンラインでオリエンテーションをしたり、授業を一部ハイブリッドにしたりするなどして対応した。

韓国	1	12 名
フィリピン	1	
パキスタン	1	
ミャンマー	1	
エストニア	1	
ガーナ	1	
ケニア	2	
インド	1	
メキシコ	1	
クロアチア	1	
クウェート	1	

教員研修生は単位修得ができないが、日本語能力に応じて、担当教員の許可が得られれば、本学で提供している授業は自由に受講できる。今年度受入れた 12 名は、それぞれ日本語の授業を含め留学生向けの科目や学部の授業などに出席した。

3. 留学生を対象とした日本語日本事情科目

3.1 2022 年度開講の留学生を対象とした科目

正規留学生のための授業

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1 回生	日本語 Ia/日本語 Ib	1（前）/1（後）	金・I 火・I	米澤千昌/李址遠 高谷由貴
	日本古代文化史 I/II	1（T1）/1（T2）	金・IV	城地茂

² 引用元：文部科学省「2022 年度 日本政府（文部科学省）奨学金留学生募集要項 教員研修留学生」https://www.mext.go.jp/content/20211209-mxt_gakushi02-000019355-06.pdf（2023 年 3 月 18 日アクセス）

	経済の目で見える地域と暮らしⅠ/Ⅱ	1 (T1) / 1 (T2)	木・Ⅲ	高山新
	日本近代文学読解入門Ⅰ/Ⅱ	1 (T3) / 1 (T4)	月・Ⅱ	石橋紀俊
2 回生	日本語Ⅱa/Ⅱb	2 (前) / 2 (後)	火・Ⅰ 木・Ⅱ/火・Ⅱ	村井卷子 井ノ口智佳/村井卷子
	日本語コミュニケーション	2 (後)	木・Ⅰ 木・Ⅱ	井ノ口智佳 井ノ口智佳
3 回生	外国語実践演習 (日本語)	2 (前)	木・Ⅰ	井ノ口智佳

学部留学生を対象とした科目は上述の通りである。学部留学生の定員化による受入れ人数増加に対応するため、日本語Ⅰa、日本語Ⅰb、日本語Ⅱa、日本語Ⅱb、日本語コミュニケーションの科目は2クラス開講している。

非正規留学生のための授業

非正規留学生対象科目

レベル	科目名	単位 (期間)	曜日・時限	担当教員
初中級	日本語初中級 a	2 (前)	月・Ⅱ	米澤千昌
	日本語初中級 b	2 (前)	火・Ⅱ	李址遠
	日本語初中級 c	2 (前)	水・Ⅱ	米澤千昌
	日本語初中級 d	2 (前)	金・Ⅲ	米澤千昌・細野怜花
	日本語初中級 e	2 (前)	金・Ⅳ	米澤千昌・細野怜花
	日本語初中級 f	2 (後)	月・Ⅱ	米澤千昌
	日本語初中級 g	2 (後)	火・Ⅱ	李址遠
	日本語初中級 h	2 (後)	金・Ⅲ	米澤千昌・細野怜花
	日本語初中級 i	2 (後)	金・Ⅳ	米澤千昌・細野怜花
中級	日本語中級会話Ⅰ/Ⅱ	2 (前) / 2 (後)	火・Ⅳ/火・Ⅲ	井ノ口智佳
	日本語中級読解Ⅰ/Ⅱ	2 (前) / 2 (後)	金・Ⅲ/水・Ⅱ	米澤千昌
	日本語中級聴解Ⅰ/Ⅱ	2 (前) / 2 (後)	木・Ⅳ/月・Ⅲ	村井卷子/長谷川ユリ
	日本語中級文法Ⅰ/Ⅱ	2 (前) / 2 (後)	月・Ⅴ/月・Ⅳ	李址遠
	日本語中級漢字Ⅰ/Ⅱ	2 (前) / 2 (後)	金・Ⅴ/金・Ⅱ	城地茂
	日本語中級作文	2 (前)	木・Ⅲ	村井卷子
中上級	日本語中上級総合Ⅰ/Ⅱ	2 (前) / 2 (後)	月・Ⅳ/月・Ⅲ	米澤千昌
	日本語中上級読解Ⅰ/Ⅱ	2 (前) / 2 (後)	木・Ⅰ/月・Ⅱ	李址遠/長谷川ユリ
	日本語中上級漢字Ⅰ/Ⅱ	2 (前) / 2 (後)	木・Ⅱ	城地茂
	時事日本語Ⅰ/Ⅱ	2 (前) / 2 (後)	火・Ⅲ/火・Ⅱ	高谷由貴
文化や社会に関する科目	Psychology and its Practice	1 (T3)	火・Ⅴ	高橋登他
	Contemporary Education in Japan	1 (T3)	木・Ⅳ	高橋登他
	日本の社会と文化Ⅰ/Ⅱ	2 (前) / 2 (後)	月・Ⅳ/火・Ⅲ	中山あおい
	日本近現代史	2 (前)	木・Ⅳ	城地茂
	日本近世文化史	2 (後)	金・Ⅳ	城地茂
	大阪の文化Ⅰ/Ⅱ	2 (前) / 2 (後)	火・Ⅳ	米澤千昌他

	日本の伝統文化I/II	2（前）/2（後）	月・V/金・I	中山あおい他/池田利 広他
	文化交流実践研究I/II	2（前）/2（後）	集中	高橋登他
	日本文化研究	2（前）/2（後）	集中	指導教員・センター 教員

新型コロナウイルスの影響で中断していた交換留学生の新規受入れが 2021 年度前期より再開したが、渡日できる時期が不透明であったため、2021 年度前期は、上記授業一覧の中の太字の科目を交換留学生向けにオンラインで、それ以外の科目を日研生、教研生向けに対面で開講した。オンライン科目は受講留学生の滞在国と日本との時差を考慮し、全て午後に授業を実施した。後期は日研生、教研生、交換留学生を対象に全ての科目を対面で実施した。上記科目以外にも、いくつかの正規生用科目において、非正規留学生の受講が認められた。下記表に記す科目が、その一覧である。

前期 (T1/T2)	日本語 I a	後期 (T3/T4)	日本語 I b
	日本語 II a		日本語 II b
	日本古代文化史I/II		日本近代文学読解入門I/II
	経済の目で見える地域と暮らし I/II		読むための視点
	日本事情		日本語の文法
	English World		日本語学研究 I B
	国際理解教育		日本語学演習
	オーラルコミュニケーション 上級I		日本語教育概論 B
	スポーツ実技		国際理解
			外国人児童生徒教育
			アジア理解教育
			English World
			オーラルコミュニケーション 中級 II
			オーラルコミュニケーション 上級 II

他にも、指導教員と相談し、受講が認められた科目に参加する留学生も見られた。

3.2 受講者数

2022 年度に日本語科目を受講した留学生数を以下に記す。

前期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	112
研究生	0
教研生	11
日研生	7
交換留学生	7
計	137

後期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	89
研究生	1
教研生	11
日研生	11
交換留学生	27
計	140

3.3 フィールドワーク、体験、自由研究を取り入れた科目

大阪の文化Ⅰ・Ⅱ

本学が大阪にあるという特色を生かし、大阪やその周辺の歴史や文化について、フィールドワークを通して学んでいく授業である。「大阪の文化Ⅰ」では、大阪城と柏原市歴史資料館を見学した。「大阪の文化Ⅱ」では、能体験、和菓子作り体験、重要文化財奥田家住宅見学を実施した。さらに日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（双方向）による奨学金受給のためのプロジェクトの一環として「歴史上の大事件を追体験プロジェクト」も「大阪の文化Ⅱ」の授業内で実施し、2023年1月17日（火）と24日（火）に受講生による発表会を、一般学生や教職員にも公開する形で行った。



大阪城天守閣



柏原市歴史資料館

日本の伝統文化Ⅰ・Ⅱ

日本の伝統文化は、本学の教員の多様な専門性を活かし、日本の様々な伝統文化について体験的に学ぶ授業である。「日本の伝統文化Ⅰ」では、陶芸、柔道、剣道、浮世絵を、「日本の伝統文化Ⅱ」では書道を体験し、日本の伝統文化について学んだ。

文化交流実践研究Ⅰ・Ⅱ

文化交流実践研究は留学生が正規学生や地域の小学生と交流することで日本の文化や社会に対する理解を深めるだけでなく、日本の学生や地域の小学生の国際理解を促進することを目的に開講している授業である。留学生は正規学生と協働しながら自国を紹介するプレゼンテーションを作成した後、前期は2022年7月12日（火）、13日（水）に、後期は2023年2月7日（火）、8日（水）に柏原市内にある小学校を訪問して自国文化の紹介や児童との交流を行った。

日本文化研究

「日本文化研究」は交換留学生と日研生の修了要件として課されているもので、指導教員の指導のもとでレポートを作成し、発表する。レポートは 1) 日本の言語・社会・文化等に関する論文 2) 体験実践報告 3) 留学成果報告 の 3 つのカテゴリーに分かれており、

日研生はカテゴリ1を選択しなければならない。留学期間が1学期間のみの交換留学生はカテゴリ3を選ぶことができる。

修了レポートの成果を発表する「修了レポート発表会」は、前期は8月3日（水）に、後期は2023年2月8日（水）に対面とオンラインのハイブリッド形式で行われた。また後期は2月9日（木）に教研生の研究成果の発表会も行った。

前期	2022年8月3日（水）9:30～12:00	日研生	7名	9名
		交換留学生	2名	
後期	2023年2月8日（水）13:00～16:45	交換留学生	13名	25名
	2023年2月9日（木）13:00～16:30	教研生	12名	

4. 留学生の生活・就学支援

4.1 オリエンテーション

グローバルセンターでは、新学期が始まる時期に留学生を対象としたオリエンテーションを行っている。2022年度は下記スケジュールでオリエンテーション・履修ガイダンスを行った。

前期は既述の通り、交換留学生が渡日できずオンラインでのプログラム実施が決まっていたため、新入非正規留学生オリエンテーションを2回に分け、交換留学生にはオンラインで、教員研修留学生には対面で実施した。また教研生の中にも4月時点で渡日できていない学生が2名いたため、それぞれオンラインで個別にオリエンテーションを実施した。

新入正規留学生については、専攻別新入生ガイダンス、グローバルセンターによるオリエンテーションに加え、2022年度は生協学生委員会企画の「時間割相談会」の日程を新入留学生（学部生）に周知し、履修サポートを行った。「時間割相談会」は生協学生委員会のメンバーが相談に乗るため、事前に留学生教育部門の教員と生協学生委員会の代表者が打ち合わせを行い、留学生特有の履修上の注意事項について説明を行った上で実施してもらった。

後期は、非正規留学生には履修ガイダンスに加え、2回の履修登録相談会を行った。これは、9月末に本学に来た交換留学生や日研生が履修登録できる期間が、修正・確認も含めて1週間のみと限られていたためである。学部生については、2022年度は9月に1回生を対象とした在校生オリエンテーションを実施した。オリエンテーションの目的は、「大学生活の充実」であり、本学で利用できる留学生のためのサポートを紹介したり、先輩からの体験談の共有、先輩との交流の時間を設けたりした。

前期	4月1日（金）	新入非正規留学生プレースメントテスト
	4月6日（水）	新入非正規留学生オリエンテーション・履修ガイダンス（交換留学生）
	4月7日（木）	新入非正規留学生オリエンテーション・履修ガイダンス（教研生・研究生） 在校非正規留学生オリエンテーション・履修ガイダンス（日研生）
	4月11日（月）	新入正規留学生オリエンテーション・履修ガイダンス
後期	9月20日（火）	在校正規留学生（1回生）オリエンテーション
	9月28日（水）	在校非正規留学生オリエンテーション・履修ガイダンス（交換留学生・教研生）

	9月29日（木）	新入非正規留学生プレースメントテスト
	9月30日（金）	新入非正規留学生オリエンテーション・履修ガイダンス（交換留学生・日研生）
	10月3日（月） 10月4日（火）	非正規留学生履修登録相談会
	10月5日（水）	日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（双方向）奨学金受給者説明会

4.2 チューター制度

本学では、留学生が大学生活や学習上のサポートを受ける「チューター制度」を実施しており、チューター担当者を対象とした説明会を行っている。2022年度前期は正規生と非正規生のチューター会議を1回ずつ計2回、後期は論文指導と非正規生のチューター会議を1回ずつ、計2回実施した。チューター制度については、学部留学生の定員化による受入れ人数増加により、同じ専攻内でチューター学生を探すことが容易ではなくなったため、今後、どのようにチューター学生を見つけ、留学生とのマッチングを行うかが課題となってくる。

4.3 アカデミック・ライティングサポート

正規留学生のアカデミックライティングスキルの向上を目指し、2022年度後期に試行的にアカデミック・ライティングサポートを実施した。レポートの課題が集中する学期末に期間を絞り、以下のような形で実施した。

実施期間：2023年1月11日（水）～2月10日（金）

実施日時：水曜日（14:00～17:00）、金曜日（13:00～14:30、16:30～17:00）

※休日を除く

場所：GLC（A-206）もしくは Zoom

サポート内容：日本語のチェック、基本的なレポートの書き方についての助言、わかりにくい文を指摘し、修正文案を一緒に考える等

サポート体制：サポーター2名が GLA で待機。当日の飛び込み参加可（オンラインでの予約優先）。1回の相談枠は30分、空きがあれば延長可。

このサポートについては、留学生にメールで呼びかけたり、GLCの前にポスターを貼ったりする他、教員からも授業内で声をかけてもらうよう周知を行った。その結果、8名の学生（学部生4名、大学院生4名）の利用があった。サポートを受けた学生に事後アンケート調査を行ったところ、「親切に指導してくれた」「提出するときに心強かった」と、サポートに対する肯定的な意見が多く見られた。また今後のレポート・論文作成に活かせるような点については、「話しことばと書きことばの使い分け」や「段落のバランス」「句点の使用」等の回答が見られた。利用者数はそれほど多くなく、周知の方法については改善が必要であるが、このサポート自体は今後も継続して行っていくことが決定した。

4.4 その他のサポート

2022 年度は正規留学生のための対応・対策マニュアルを作成した。今マニュアルに則り、就学に困難を抱える正規留学生に対しては Teams を用いて対応チームを結成し、対応にあたった。

5. 留学生のための行事

5.1 国際イベントコミュニティ Soleil（ソレイユ）主催の留学生歓迎会

2022 年度後期は新たに来日した非正規留学生を主な対象に、ソレイユ主催の歓迎会を行った。グローバルセンターは企画の段階から相談に乗り、実施内容や周知の方法についての助言を行ったり、企画決定後には留学生に声をかけたりし、歓迎会実施に向けて協力した。

5.2 日本文化研修

2023 年 2 月 10（金）に春季日本文化研修を実施し、留学生 18 名が参加した。今回は大阪府池田市にあるカップヌードルミュージアムを訪れた。当日は午前中に大学内の講義室で「世界に広がる日本の食文化」というテーマで講義を行い、その後バスでカップヌードルミュージアムへと出発した。カップヌードルミュージアムでは、オリジナルのカップヌードルを作った後は、世界中に広まっているインスタントラーメンの、誕生から発展について展示を見ながら学んだ。

5.3 重要文化財民家での住文化体験

2023 年 2 月 18 日（土）に、国指定重要文化財・奥田家住宅（大阪市平野区）で、住文化体験を実施し、日研生ら 10 名が参加した。奥田家住宅のご家族と交流するとともに、お屋敷の見学、砂紋引き体験、かまどの火付け体験などをし、かまどで炊いたおにぎりを試食した。「ドラマやアニメでみて、ずっと憧れていた日本の昔の家を訪問できて感動した」「昔のかまどを実際に体験して、自分の国と似ている点や違う点があるのが興味深かった」などの感想が聞かれ、留学生にとって貴重な体験となった。

6. 地域との交流活動等

6.1 学校等への留学生派遣

柏原市や東大阪市内の小中学校に在籍する外国にルーツのある児童生徒の母語支援や学習支援のために、教育委員会等からの要請に応じて本学の留学生を派遣している。2022 年度は 6 件の依頼に対して留学生を派遣した。留学生は各校において、通訳、簡単な日本語の指導、学習支援、および保護者向けの文書の翻訳等を行い、外国にルーツのある児童生徒の学校生活をサポートした。

上記以外にも、小中高等学校における多文化共生教育や国際理解教育を目的とした教育委員会や各学校からの要請に対しても留学生を派遣した。2022 年 7 月 14 日（木）には本

学の教研生ら 10 名が大阪府立桜和高等学校³を訪問し、そこで勉強している南高等学校の生徒が行う ENGLISH SUMMER SEMINAR 2022 に参加した。9 月 12 日（月）には 8 名の教研生が再び同校を訪問し、同校生徒が 7 月の交流をもとに準備したプレゼンテーションの審査員として授業に参加した。授業参加以外にも、教員との交流や授業見学もさせていただき、双方にとって学びの多い時間となった。他にも東大阪市内の小学校に留学生を複数回派遣した。

本学の附属学校からの依頼では、2022 年 11 月 5 日（土）、2023 年 2 月 11 日（土）、21 日（火）の計 3 回、附属平野小学校から派遣要請があり、本学の留学生が外国語活動の授業に参加し、小学生と交流した。2023 年 3 月 8 日（水）には附属平野高校における多文化理解講座に留学生 5 名が参加し、19 名の高校 1 年生と交流した。交流では、留学生の出身国の文化や言葉について、5 グループに分かれて PPT を見せながら紹介し、自由にディスカッションをした。他にも附属池田中学校に複数回留学生を派遣したり、本学附属学校課からの依頼で高校生国際会議ワークショップに留学生が参加したりもした。

6.2 ボランティアグループとの活動

香芝市のボランティアグループ「グローバル香芝」主催のオンライン日本語教室が毎週木曜日の 4 限と 5 限に行われた。コロナ禍以前は本学柏原キャンパス内の教室を使って対面で開催されていたものであるが、2020 年度以降、オンラインでの実施が続いている。地域住民と接する数少ない機会であるとともに、大学の授業では学ぶことができない日本や留学生の出身地の文化、社会について学ぶことができる貴重な機会となった。2023 年 1 月 26 日（木）には、グローバルセンター主催で、グローバル香芝と本学留学生の交流会を対面で実施した。2020 年 4 月以降対面での交流が中断されていたため、久々の対面交流となった。

2023 年 2 月 11 日（土）には、グローバル香芝主催の「日本の文化を楽しむ集い」が開催された。また 3 月 26 日（日）には「国際交流 in 香芝」が開催され、本学の留学生がそれぞれの国について発表を行い、地域の方と交流を行った。

2022 年 12 月 14 日（水）にはシニア CITY 自然大学校が行っている総合文化科講座の中の「国際交流講座」に本学の留学生を 3 名派遣し、文化紹介や交流を行った。

7. その他

2022 年 12 月 26 日（月）に大学院教育学研究科・教育協働学科・グローバルセンターの共催で全学 FD 事業「留学生の修学における課題と展望」が実施された。グローバルセンターからは学部留学生の満足度調査アンケートの結果を報告した。

³ 大阪府立桜和高等学校は、2022 年 4 月に大阪市立南高等学校、大阪市立西高等学校、大阪市立扇町総合高等学校の 3 つの高校を再編整備してできた新しい高校で、2022 年度は、桜和高等学校 1 年生と南高等学校、西高等学校、扇町総合高等学校の 2、3 年生が同じ校舎で勉強をしていた。

国際教育部門

部門長 橋本 健一 准教授（多文化教育系・英語教育部門）
赤木 登代 教授（多文化教育系・グローバル教育部門）
李 址遠 特任准教授（多文化教育系・グローバル教育部門）
井上 直子 教授（多文化教育系・グローバル教育部門）
ギンズバーグ ジェイソン 准教授（多文化教育系・グローバル教育部門）
小林 和美 教授（多文化教育系・社会科教育部門）
篠崎 文哉 特任講師（多文化教育系・英語教育部門）
中野 知洋 准教授（多文化教育系・グローバル教育部門）
中山 あおい 教授（多文化教育系・グローバル教育部門）
箱崎 雄子 教授（多文化教育系・英語教育部門）
プール ジャスティン 特任講師（多文化教育系・英語教育部門）
米澤 千昌 特任講師（多文化教育系・グローバル教育部門）
王 林鋒 特任准教授（高度教職開発系・高度教職開発部門）

国際教育部門は交換留学や短期研修の企画・実施に関わる業務を行い、本学学生の海外派遣を支援する部門である。2020 年から続く新型コロナウイルス感染症の影響は 2021 年度を超えて 2022 年度に入っても根強く残っており、ウクライナ・ロシア情勢についても引き続き国際交流を難しいものになっているが、本学学生の海外派遣については 2021 年度末に 5 名の交換留学生を派遣するなど、少しずつではあるが再開への道を辿り始めた感がある。海外渡航には出入国で大きな制約があり、円安・燃料費高騰・スタッフ確保などの複合的要因で特に航空運賃が急激に値上がりするなど、困難は未だ多く存在する。それでもなお、昨年度の年報で期待を込めて書いた『2022 年度こそポストコロナの海外交流を実現していく 1 年になっていく』ということについては、総合的に見ればその通りの 1 年になったと言えるのではないだろうか。

本稿では 2022 年度に実施された海外派遣の説明会や関係するイベントの振り返り、そして本年度に実施した交換留学派遣・短期研修派遣・オンライン研修等について報告して、ポストコロナの海外交流とはどのようなものであったのか、そして 2023 年度以降の学生海外派遣がどのようなものになっていくのかを考えていきたい。

1. 留学関係のイベント

新型コロナウイルス感染症のパンデミックの初期、すなわち海外渡航がほぼ不可能であった時期から、グローバルセンターでは本学学生が本来であれば参加できる海外体験に関わるプログラムを周知したり、オンラインで参加できる語学・文化プログラムを紹介するなどして、少しでもこれまでに醸成されてきた海外チャレンジの機運を維持することを目指した。2021 年 6 月の文部科学省による「大学間交流協定等に基づく 1 年間(実際の派遣期間 9 か月以上) の海外留学プログラムの再開が認める」旨の通知や 9 月の大学危機管理本部による「新型コロナウイルス感染症の影響により感染症危険情報がレベル 2・3 に指定された国・地域への海外渡航を伴う留学についての判断基準」を基に交換留学派遣が可能になったことから、2022 年度はより現実的に学生に海外体験を勧められる状態でのスター

トとなった。加えて 2022 年 2 月に 9 か月以下の学生派遣についても大学が学生の安全確保を担保することを条件に再開が認められる旨が文部科学省から通知されたことにより、短期研修についても再開できることとなった。とはいえ、短期研修については約 3 年ぶりの学生の海外派遣となり、教職員にとってもこれだけのブランクがあつての研修実施が久々であることに加えて、新型コロナウイルス関連の各種の制約もあったことから、いきなりコロナ前の規模で実施するのではなく、段階的に再開していくということで部門内の方針を固めた。

以上を踏まえて、前期は 4 月 20 日（水）に交換留学説明会を、翌週の 27 日（水）には短期研修の説明会をそれぞれオンラインで開催して、本学で参加可能な交換留学・短期研修についての概要を説明した他、担当国別教員による各国の魅力やプログラムの紹介、過去の交換留学参加者による体験談、また JSAF 担当者による認定留学の説明などがなされた。後期については 10 月 12 日（水）に交換留学説明会を、翌週の 19 日（水）に短期研修の説明会を実施した。その他特に長期留学に際して必要な IELTS の集中対策講座を JSAF に提供してもらい、6 月 15 日（水）にオンラインで実施した。参加者数は事前参加登録者ベースで前期説明会が 120 名前後、後期が 50 名前後といずれも盛況であった。IELTS の集中対策講座については 12 名の参加であったが、年間を通じて録画視聴希望者が多く、交換留学希望者を中心に英語力向上の意欲の高さがうかがえた。

2. 海外派遣事業

(1) 交換留学

交換留学を含む学生の修学・研究目的での海外渡航については、2021 年度後期派遣から一定の要件を満たしたものに限り学長の判断により認めることとなり、国際室を中心にその手続きが定められた。交換留学プログラムについてはさらに万全を期すべく、国際教育部門において申請書ベースで派遣の可否について審議を行った。その結果、上記の判断基準を満たし、受け入れ先大学が学生を受け入れており、派遣先国の感染対策・対応状況等について国際教育専門委員会で渡航可と判断できるものについては、交換留学を原則実施することとして、最終的にアメリカ・スイス・スウェーデン・フィンランドの 4 カ国に計 5 名が交換留学生として出発することが認められた（別に 1 名に派遣許可の可能性があったが、派遣先大学からの急な受け入れ不可通知により、例外的に年度をまたいで 2022 年度の留学可能性を模索することとなった）。さらに 11 月下旬から 12 月上旬にかけては 2022 年度前期派遣の交換留学生選考が行われ、アメリカ・ドイツ・フィンランド・ベトナムの 4 カ国 5 大学に計 7 名の学生を推薦することを決定した。

2022 年度の交換留学派遣においては、5 月 26 日・7 月 1 日付で外務省により感染症危険レベルの引き下げがなされ、留学対象国の感染症危険情報レベルがすべて 1 となったため、昨年度に必要とされていた学生海外派遣に関わる学内手続きが不要となり、計 7 名の派遣が実現した。また 6 月には後期派遣（2023 年 2～3 月出発）の交換留学生選考が行われて、5 名の学生の韓国・スイスへの派遣を推薦することが決定した。この 5 名については 2023 年 3 月までに各留学先に出発したことが確認されている。さらに 11 月には 2023 年度前期派遣（2023 年 8～9 月出発）の交換留学生選考が行われて、12 名（内 1 名は本稿執筆段階で語学力の条件付き）の学生の派遣推薦が決定した。

(2) 短期研修・オンライン研修

2022年度の学生海外派遣の1つの大きな動きは短期研修の再開である。上述の通り、文部科学省からの9か月以下の学生派遣を認める旨の通知を受けて、本学でも2022年度短期研修の実施に向けた取り組みが始められた。ただ、長期間派遣がストップしていた事実と新型コロナウイルスという未知のものへの対応の必要性、さらには派遣先の情勢も様々であることを考えると、同通知にある「大学が学生の安全確保を担保すること」という条件は非常に重く、いきなり全ての研修を再開するのではなく、確実に再開できるところから徐々に再開することとした。また参加者が見込まれるオンライン研修についても引き続き実施することとした。夏季研修においてはカナダ・ビクトリア大学での語学・文化研修とチェンマイ大学での英語+SDGs オンライン研修が、春季研修においてはアメリカ・UNCWの語学研修が実施され、ビクトリア大学へは11名、チェンマイ大学オンライン研修は6名、UNCW研修へは9名の学生が参加した。（上記の他にチェンマイ大学での現地研修が春季に計画されていたが、最少催行人数に届かず実施を見送った。）なお、カナダ・ビクトリア大学の研修企画・実施については、詳細を別稿にまとめているので、そちらを参照されたい。

3. その他の事業

この他に2022年度の学生派遣に関わる事業として実施されたものとして、国際交流基金が実施している「日本語パートナーズ派遣事業」における大学推薦特別プログラムを活用して、2021年度中に学内で推薦され、国際交流基金の選抜も通過した1名がフィリピンでの日本語教育支援に携わることとなった（別に1名が派遣予定であったが、フィリピンでの受け入れ目処がたたない状況が長引き、やむなく辞退することとなった）。また2022年度も大学推薦特別プログラムということで本学に推薦枠が割り当てられ、5月下旬から学内周知・募集を行い、6月に選考を行った結果、フィリピン・インドネシア・タイに1名ずつを推薦することとなり、国際交流基金での選考の結果フィリピンの1名が採用となり、2023年度に事業に参加することとなった。

またコロナ禍以前に東京学芸大学の主催で行われていた日タイ大学生国際交流プログラムについて、2022年度にタイへの学生派遣のみ再開する旨の連絡があり、10月に学内で説明会・選考を行なった結果、3名が東京学芸大学の学生チームと共にタイでの学生交流に取り組むこととなった。本プログラムの企画・実施についても、詳細が別稿にまとめられているので、そちらを参照されたい。

この他、トビタテ！留学 JAPAN 新・日本代表プログラムの申請にあたって、申請書の添削サポートを有志教員で行うなど、特に年度後半に向けて、学生の海外チャレンジを支援する動きが活発になった1年であった。

4. 次年度に向けて

ウィズコロナ・ポストコロナなど呼び方は様々であるが、国際交流という観点から言えば、過去2年の様々に辛かった時期を乗り越えて、いよいよ再活性化というステージに入ったように思われる。派遣前のオリエンテーションや引率などでの学生の表情を見ると、自然とこちらも頬が緩むところがある。とはいえ、新型コロナウイルスの変異についてはいまだに警戒を解くことはできず、またウクライナ・ロシア情勢、燃料高、円安等、懸念事項は尽きない。大学のプログラムとして学生を派遣する以上、まずもって学生の安全が第一である。近年の国際交流イベントでも危機管理体制の構築についての議論が盛んに行われていて、本学もこの点について一層の充実を目指して取り組んでいるとこ

ろである。また様々なリソースの適切な分配等、学内的な調整を要する点も多くある。課題は多くあるが、明らかに 2022 年度は本学の国際交流における大きな転換点となった。2023 年度はさらに多くの学生が世界を体験できるよう、スタッフ一丸となって取り組んでいきたい。

語学教育部門

部門長 Justin Parker Pool 講師（多文化教育系英語教育部門）
副部門長 篠崎 文哉 特任講師（多文化教育系英語教育部門）
橋本 健一 准教授（多文化教育系英語教育部門）
Robert Sanborn Brown 准教授（多文化教育系グローバル教育部門）
小林 翔 特任准教授（多文化教育系初等教育部門）
筒井 瑞貴 特任講師（多文化教育系グローバル教育部門）

1. 語学教育部門の取組体制

語学教育部門は英語教育部門 3 名、グローバル教育部門 2 名、初等教育部門 1 名で構成されている。

語学教育部門は、以下の目標を掲げている。

- 1) 学生の留学意欲を高める。
- 2) 学生の外国語・外国文化学習への取り組みを支援する。
- 3) 語学の外部試験の目標達成を支援する。
- 4) 学生が自律的に学習できるよう、学習計画の立案を支援する。
- 5) グローバル・ラーニング・コミュニティ（GLC）を運営する。

2. 語学教育部門の役割分担

2022 年度には、メンバーの役割をより明確にするために再編成した。部門長は、語学教育部門の会議を主催し、グローバルセンター運営委員会の会議に参加し、すべての GLC プログラムを承認する。副部門長は、グローバルセンター運営委員会の会議に出席し、部門会議の議事録を作成する。その他の役割は以下の通りである。

事項	担当教員数	内容
語学教育プログラムの検討	3 名	授業・履修に関連した部門テスト（英検 IBA、TOEFL ITP）の実施、語学教育プログラムの検討
自律学習支援		
ランチタイムチャット	1 名	ファシリテーターを務める教員研修留学生に対する指導、プログラムの検証
プログラム企画	3 名	今年度実施プログラムの検証、次年度のプログラムの検討
学習相談	2 名	ネイティブ教員による 1-on-1 レッソンの実施、アドバイザーによる学習相談
図書サービス	1 名	GLC 図書サービス、図書管理方法、蔵書について
GLC サポーター	1 名	日常の GLC サポーターの活動、サポーター企画の承認、インスタグラム等による情報発信
外部テスト	2 名	GLC 主催の外部テスト（英検、TOEIC IP）の実施、試験監督
天王寺ランゲージチャットルーム	1 名	副ルーム長（天王寺キャンパス）、ランゲージチャットルーム主催プログラムの承認
広報	1 名	外国語学習支援ルーム、各プログラム及び語学学習に関する周知

3. 語学教育部門会議

語学教育部門会議は 3 ヶ月に 1 回程度開催した。英検 IBA や TOEFL ITP テストの運用、終了した GLC プログラムの反省や今後の GLC プログラムの企画について話し合った。下記 4 回の会議のほか、

Microsoft Teams を使った議論も行った。

- 第1回 2022年5月31日（火）（Zoomによるオンライン会議）
- 第2回 2022年7月28日（木）（Zoomによるオンライン会議）
- 第3回 2022年12月13日（火）（Zoomによるオンライン会議）
- 第4回 2023年2月27日（月）（Zoomによるオンライン会議）

4. 外部試験について

大阪教育大学では、学生の英語力を測定するために、英語の外部試験を実施している。教員養成課程では、1年生、2年生、3年生の全員が英検 IBA を受験した。4年生はそれに準ずる試験を実施した。教育協働学科では、1年生に TOEFL ITP レベル 2 を、2年生にレベル 1 を課した。

5. 留学への動機付けを促す外部試験および外部試験対策

語学教育部門は GLC と連携し、外部試験対策を通じて学生の留学意欲を高めることに努めた。GLC では英検二次試験だけでなく、英検ライティング対策クラスも年間 3 回開催した。いずれも英検の試験日程に合わせて実施した。IELTS 集中講座は前期に、TOEIC 550 点対策と 750 点対策は各セメスターで実施した。また、GLC では後期に英検団体受験と TOEIC IP テストを実施し、のべ 42 名の学生が受験した。

6. 外国語学習支援ルーム（Global Learning Community）の取り組み

外国語学習支援ルーム（GLC）は、大阪教育大学の学生、留学生、教員、スタッフ全員が、世界とつながり、外国語でのコミュニケーション能力を高め、世界の人々と楽しく出会い、学習と文化理解を促進するためのスペースである。メンバーが互いに支え合うコミュニティであることを意味している。GLC の運営は語学教育部門の管轄となっている。今年度を実施したプログラムの詳細は以下のとおりである。

(1) 講座

英語ランチタイムチャット：前期は 4 カ国（インド、メキシコ、クロアチア、ケニア）の教員研修留学生がランチタイムチャットを担当した。後期はさらに範囲を広げ、9 カ国（ケニア、エストニア、ガーナ、フィリピン、パキスタン、ミャンマー、インド、メキシコ、クロアチア）10 名の教員研修留学生がセッションを担当した。前期と後期を合わせ、のべ 289 名の学生が参加した。

語学検定対策講座（英検、TOEIC、IELTS など）には、のべ 219 名の学生が参加した。

天王寺キャンパスでは、前期に初級英語、多読、ライティング、スピーキングに焦点を当てた 4 回の講座「Step Up English」を開催し、のべ 17 名の学生が参加した。後期は、新規講座として「指導法も学べる！楽しく英語でやり取りするコミュニケーション」を開講し、のべ 30 名の学生が参加した。

(2) 個別相談・学習相談

- 前期はプール講師、後期はブラウン准教授とプール講師が担当した One-on-One Lesson
年間のべ 26 件の利用
- アドバイザーによる学習相談
年間のべ 17 件の利用

(3) 語学検定

- 英検団体受験：1 次試験（2022 年 10 月 1 日）、14 名受験

- TOEIC IP テスト：リスニングとリーディング（2023 年 1 月 18 日）、29 名受験

(4) 図書貸出（2023 年 2 月末時点）

- 柏原キャンパス：1,041 冊（昨年度 727 冊）
- 天王寺キャンパス：39 冊（昨年度 27 冊）

(5) GLC への来室と目的（2023 年 2 月末時点）

7 月 1 日から来室者の記録を開始し、2 月末までにのべ 2,254 人の来室があった（1 日平均 22.1 人）。年間の来室者数は約 3,500 名と推計。

来室目的

外国人留学生および留学生チューターによる相談、書類提出・受取	39%
図書利用	27%
学習相談・チャット参加	14%
外国人留学生の奨学金サイン、在籍確認	7%
海外留学相談、書類提出・受取	7%
その他	6%

(6) GLC サポーター活動

活動体制

約 10 名が GLC の開室日 10 時～15 時までシフトを組み勤務した。来室者の対応やチャット運営、そして広報・図書・留学相談・学生企画の担当を決め、自主的に活動した。サポーター会議を 8 回実施した。インスタグラム（学生アカウント）で情報発信も行った。

留学生の交流イベント

日本語チャット	前期は教研究生を中心に、後期は交換留学生を中心に、のべ 81 人が参加した。開催日時は火曜日の昼休み、前期と後期を合わせ 12 回開催した。
ドイツ語チャット	7 月から水曜日の午後に行った。9 回実施し、のべ 48 人が参加した。
韓国語チャット	12 月から木曜日の午後に行った。4 回実施し、のべ 20 人が参加した。
新春かるた大会	1 月に英語チャットが終了した後の交流イベントとして企画された。4 回実施し、交換留学生を中心に、のべ 25 人が参加した。
留学体験報告会	フィンランド交換留学、アメリカ私費留学から帰国した直後の学生 2 人が渡航までの計画や準備、現地での経験について報告した。1 月 30 日の昼休みに開催し、対面とオンラインで、のべ 14 人が参加した。

連携開発部門

部門長 中野 知洋 准教授（多文化教育系グローバル教育部門）
井上 直子 教授（多文化教育系グローバル教育部門）
王 林鋒 特任准教授（高度教職開発系高度教職開発部門）
亀井 一 教授（多文化教育系グローバル教育部門）
後藤 健介 准教授（健康安全教育系健康安全科学部門）
城地 茂 教授（多文化教育系グローバル教育部門）
出野 文莉 准教授（表現活動教育系美術教育部門）
仲矢 史雄 教授（理数情報教育系理数情報部門）
Brown Robert Sanborn 准教授（多文化教育系グローバル教育部門）

1. 連携開発部門会議の実施

連携開発部門では、海外の大学との大学間交流協定の締結や更新、海外交流重点校等との連携に関わる議題を検討した。令和4年度は6月8日（水）に今年度の方針を話し合う部門会議を開催したほか、諸問題に対応するため随時メール会議を開催した。

2. 協定校との連携

（1）大学間交流協定の締結

令和4年度には、以下の海外の大学と大学間交流協定を締結した。
台湾・台北市立大学との学術協定を更新し、新たに学生交流協定を締結した。
韓国・大邱教育大学と学生交流協定を締結した。

（2）海外交流重点校との連携

昨年度に引き続き、現在8校選定されている海外交流重点校について、配分額を審議し、4校への配分を決定することで、学術交流促進の支援を行なった。

3. 国際会議

（1）第13回 グローバルセンター国際シンポジウム（全学FD事業）

11月16日（水）、2名のゲストと本学教員という海外経験豊富な3名の講師による、ポストコロナ時代を見据えた国立大学の国際化のあり方を考えるシンポジウム「大学の国際化・多文化化」をオンラインで開催し、学生及び教職員合わせて約40名が参加した。

高知大学人文社会学部の高橋教授の講演「オンライン時代の海外実習」では、高知大学におけるオンライン留学の取組とその困難さについて述べた。

本学表現活動教育系の出野准教授の講演「美術・書道の中国文化研修体験—学生のグローバル的な視野を育成する—」は、中国・天津への学生引率の経験から、書家や水墨画家による実践指導などの事例を紹介し、専門分野における国際交流の重要性を説明した。

また本学の協定校でもあるリヨン第三大学日本語学科の細井准教授の講演「フランスで日本文化を教える」は、フランスの大学で日本学を教える際に、常に「どうしてフランスで日本人が教えなければならないのか」という問いを念頭に置くことの大切さを伝えた。海外での就職にはビザという課題を乗り越える必要があり、そのためには語学力を磨くだけでなく、日本学に関する知識を培うこと

も重要と強調した。

参加者からは「オンラインと対面のギャップについて、身につまされるところが多く、興味深かった」「日本人がフランスで仕事を得ることについて、非常に貴重なお話を伺うことができた」などの感想が寄せられた。

（２）東アジア教員養成国際コンソーシアム（ICUE）運営委員会

令和４年度は中国・西南大学校が主催した第１６回 ICUE シンポジウムが１０月２９日（土）にオンラインで実施され、本学からは田中教授、王特任准教授が発表した。

また、令和５年に日本において実施予定の第１７回シンポジウムについて、共催校である東京学芸大学とオンライン会議を開き、日程やテーマについて検討を重ねた。

（３）大邱教育大学との教員研修プログラム

本学と大邱教育大学は２０２２年１２月２１日、柏原キャンパスＢ３棟会議室において教員研修プログラムを開催した。

岡本学長の挨拶、PARK PHANWOO 大邱教育大学学長の挨拶に続き、本学から土山教員養成課程長「日本における新しい教員養成の幕開け——フラッグシップ大学としての本学の取り組み」、裴初等教育教員養成課程長「Society 5.0（第４次産業革命）時代の日本の初等教育の特性と提案」、大邱教育大学からキム教授「大韓民国 SW/AI 教育政策と大邱教育大学の位相」、SON 教授「HAPNB（Human-Animal-Plant-Nature Bond）教育」と、両大学から教員２名ずつが大学改革の取り組みと教育について発表を行った。大邱教育大学の大学教員および職員の一行は７０名近く、本学からは教職員、通訳学生も含め３０名程度が参加した。

質疑応答では大邱教育大学の教授から「本日のシンポジウムのテーマは、『大学教育の革新』となっているが、午前中に授業観察した附属小学校の子供たちがこの寒いのに半ズボンで過ごしているのは何故なのか」といった質問がなされた。

ワークショップタイムでは、日韓の教員が複数のグループに分かれて、互いの大学の近況や学問の専門領域について活発に語り合った。

（４）国際教育フェアへの参加

スペイン・バルセロナで開催された EAIE（９月１３日～１６日）に箱崎センター長・中山副センター長、王特任准教授が参加し、すでに本学と提携している大学との情報交換、これまで交流のなかった多数の大学と面談を行った。

タイ・バンコクで開催された APAIE に、橋本准教授が参加した。

また NAFSA については、費用対効果およびコロナ禍の状況、日程を考慮した結果、不参加とした。

４．広報誌の発行

令和４年度から、グローバルセンター広報誌『OVER the RAINBOW』の年２回の発行を連携開発部門が担当することになった。第３１号、第３２号を発行した。

令和 4 年度 グローバルセンター行事

新入生オリエンテーション

令和 4 年 4 月 6 日（水）・7 日（木）・11 日（月）

9 月 28 日（水）・30 日（金）

令和 4 年度前期（4 月）、後期（10 月）の入学者に対するオリエンテーションを開催しました。これは新入生に対して留学生活や大学生活全般にわたって案内を行うもので、今年は表のとおり 105 名の新入生が入学しました。

箱崎グローバルセンター長の歓迎あいさつにはじまり、日本語の授業や図書館の利用方法、資格外活動、国民健康保険、奨学金に関する事等について説明を行いました。

＊なお、前期（4 月）入学の交換留学生は、新型コロナウイルスの影響によりオンラインでのプログラム実施となり、Zoom を使ってオンラインでオリエンテーションを行いました。

区分	前期	後期
学 部 生	37	—
大学院生	11	—
教 研 生	12	—
日 研 生	—	11
研究留学生	1	2
特別聴講学生	7*	22
研 究 生	0	2
計	68	37

オンライン留学説明会を開催

令和 4 年 4 月 20 日（水）・27 日（水）

10 月 12 日（水）・26 日（水）

令和 4 年度「交換留学説明会」「海外短期研修説明会」を実施しました。これらの説明会は、留学に興味のある学生に対して、留学の種類や特徴、必要な語学力など留学に関する情報を分かりやすく伝えることを目的として毎年・後期各 1 回ずつ行っています。

4 月 20 日（水）・27 日（水）には、それぞれの説明会をオンラインで実施し、両日とも例年を上回る 100 名以上の参加がありました。交換留学説明会では、グローバルセンター担当教員が交換留学に関する全体的な説明を行い、制度や交換留学ならではのメリット、各協定校の情報などについても詳しく説明しました。海外短期研修説明会では、本学が提供する短期研修プログラムの説明を行い、各研修担当教員が、短期研修のイメージが湧くようにと過去に実施された研修の写真などを用いて各国の紹介を行いました。新型コロナウイルス感染症の影響により、2020 年度から中止していた短期研修ですが、本年度より再開し、実際に現地へ渡航するカナダ・ビクトリア語学研修とオンラインで実施するタイ・チェンマイ大学の SDGs&英語研修を紹介しました。

また、後期も同様に説明会を行い、交換留学中の学生とオンラインでつなぐ機会を設

け、現地の様子や留学の計画の仕方など、学生が目線に立った経験談を紹介しました。海外短期研修については、アメリカ・ノースカロライナ大学ウィルミントン校で行う語学研修・観察実習の研修プログラムを紹介しました。

参加した学生からは、「交換留学と短期研修の違いなど明確な情報を得ることができた」「同じ大学にこんなにすごい方がいるのだと知ることができ、本当にためになった」など様々な感想が寄せられました。



オープンキャンパスを開催

令和 4 年 7 月 30 日（土）・31 日（日）

コロナ禍の影響により 2 年連続オンラインでの開催となっていたオープンキャンパスを、7 月 30 日（土）はオンライン形式で、31 日（日）は 3 年ぶりとなる対面形式で開催しました。

オンライン形式の 30 日（土）には、課程・専攻・コース別の全体説明会、ライブでの模擬授業、入試アドバイザーによる個別相談会など、双方向コミュニケーションのプログラムが実施されました。

3 年ぶりの対面形式開催となった 31 日（日）には、対面での模擬授業や専攻・コース別の個別相談会のほか、保護者のための講座、学生によるキャンパスツアーに加え、学生オーケストラによるミニコンサート、クラブ・サークルによる演劇やダンスなどのパフォーマンスも披露されました。

グローバルセンターでも 3 年ぶりに対面で個別相談会を実施しました。留学に関心のある高校生や入学希望の留学生が多く訪れ、先輩やグローバルセンター担当教員の話に熱心に耳を傾けていました。



令和 4 年度前期留学生修了証書授与式を举行

令和 4 年 8 月 9 日（火）

令和 4 年度前期留学生修了式を、8 月 9 日（火）に柏原キャンパスで举行し、9 名の留学生（日本語・日本文化研修留学生、交換留学生）、赤木登代副学長、箱崎雄子グローバルセンター長、中山あおいグローバル副センター長、指導教員が出席しました。

再拡大が懸念される新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、昨年同様、参加者を学内者に限定し、参加者同士のソーシャルディスタンスを十分に保ちながらの実施となり

ました。また、渡日せずにオンラインのみで交換留学プログラムを修了した一部の留学生のため、対面・オンラインのハイブリッド方式で挙行了しました。

赤木副学長は祝辞の中で、「みなさんは日本を留学先を選び、日本の文化に直に接し、日本の人々と出会い、様々な体験をしたことでしょう。まだ若いみなさんが遠い未来、日本語や日本文化を学んだことでとても豊かな人生になったと思ってくださることを心から願わずにはられません」と、お祝いの言葉を述べ、その後、留学生一人ひとりに修了証書を授与しました。

修了証書授与後、修了生代表のオウ イコウさん（中国出身・日本語・日本文化研修留学生）がスピーチを行い、「素敵な人々との出会いに恵まれたことで、私たちの1年間の留学生活がかけがえのない貴重な思い出になりました。この1年間で築き上げてきた大切な絆は断つことなく未来に続くと思っています」と思いを述べました。

最後に、箱崎グローバルセンター長から、「日本語は、みなさんにとって、国際的な新しい扉を開けてくれたものではないかと思います。日本で過ごした、そして大阪教育大学で過ごした日々を思い出しながら、また新たな扉を、今度は国に帰って他の方々にも開けてくだされば幸いです」と、はなむけの言葉が贈られました。



第 13 回グローバルセンター国際シンポジウムを実施

令和 4 年 11 月 16 日（水）

第 13 回グローバルセンター国際シンポジウム「大学の国際化・多文化化」を、令和 4 年 11 月 16 日（水）に Zoom によるオンラインで開催しました。本シンポジウムはグローバルセンターが教員養成の国際的な視点に基づくテーマで毎年実施しているもので、今年度は学生及び教職員合わせて約 40 名が参加しました。

ゲストとして高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門の高橋俊教授と本学の協定校であるフランス・リヨン第三大学日本語学科の細井綾女教授を招き講演を行いました。また、本学からはグローバルセンター担当教員・教員養成課程美術教育部門の出野文莉准教授が発表しました。

シンポジウムでは、初めに高橋教授が高知大学におけるオンライン留学の取り組みを紹介するとともに、オンライン留学の課題や今後の展望について報告しました。また海外とのワークショップの実践も紹介しました。出野准教授は、2015 年から続けてきた中国・天津大学への学生引率の事例を基に、専門分野における国際交流の重要性を説明しました。細井教授は、「フランスで日本文化を教える」と題し、フランスの大学で日本学を教える際の心がけや、海外で働く自身の経験を紹介しました。

参加者からは「オンラインと対面のギャップについて、身につまされるところが多く、興味深かった」「日本人がフランスで仕事を得ることについて、非常に貴重なお話を伺うことができた」等、多くの感想が寄せられました。



令和4年度後期留学生修了証書授与式を挙行

令和5年2月15日（水）

令和4年度後期留学生修了式を2月15日（水）柏原キャンパスで挙行し、21名の留学生（教員研修留学生、交換留学生）、中原秀人国際担当理事、赤木登代副学長、箱崎雄子グローバルセンター長、中山あおいグローバル副センター長、指導教員が出席しました。

前期に引き続き、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため参加者を学内者に限定しての実施となりましたが、本格的な国際交流が再開した1年を締めくくる式となりました。

初めに、赤木副学長が『梁塵秘抄（りょうじんひしょう）』の中の「遊びをせんとや生まれけん」という「今様（いまよう）」を紹介し、「『人生』は大いなる『遊び』です。また、みなさんが学んでいる『文化』は『遊び』の集大成なのです。ぜひご家族や友人と一緒に二度、三度と日本へ『遊び』に来てください」と祝辞を述べ、その後、留学生一人ひとりに修了証書を授与しました。

修了証書授与後、修了生代表のキム ウイギョンさん（韓国出身・教員研修留学生）がスピーチを行い、「私たちは各自の留学生生活を終えて国に帰りますが、ここで経験し感じたすべてのことは、私たちの人生で忘れられない思い出となり、良い影響を与えてくれると思います」と述べました。

最後に、中原理事が日本語と英語を交えながら「When you are asked, “When was the best time of your life?”, I want you to always say “Now!”、みなさんがこの先何歳になっても、人生で最良のときはいつだったかと聞かれたら『今だ』と言ってほしい」と、修了留学生にはなむけの言葉を贈りました。



韓国・大邱教育大学と国際学術セミナーを開催

令和4年12月21日（水）

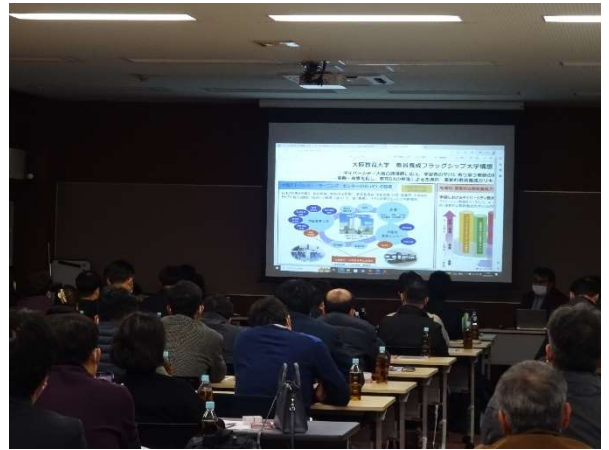
本学の協定校である大韓民国・大邱教育大学と国際学術セミナーを、12月21日（水）に対面形式で開催し、大邱教育大学側は教職員約70名、本学側は通訳学生を含め約30名が参加しました。新型コロナウイルス感染症の流行以来約3年ぶりに海外の協定校と対面形式のセミナーを実施しました。

セミナーでは、グローバルセンター連携開発部門長の中野知洋准教授司会の下、まず両大学の学長・総長が挨拶を行いました。続いて、両大学から教員2名ずつが大学改革の取り組みと教育について発表を行い、本学からは裴光雄初等教育教員養成課程長が「Society5.0時代の日本の初等教育の特性と提案」を、土山和久学校教育教員養成課程長が「日本における新しい教員養成の幕開け—フラッグシップ大学としての本学の取り組み」を発表しました。

セミナーの後はワークショップを行い、両大学の教員が複数のグループに分かれ、お互いの大学の近況や学問の専門領域について議論しました。

最後に、参加者全員で記念撮影を行い閉幕しました。





令和4年度グローバルセンター担当教員名簿

所 属 等	氏 名	所 属 部 門
高度教職開発系	水 野 治 久	留学生教育部門
高度教職開発系＊	王 林 鋒	連携開発部門・国際教育部門
総合教育系＊	安 達 智 子	留学生教育部門
多文化教育系＊	小 林 翔	語学教育部門
多文化教育系	井 上 博 文	留学生教育部門
多文化教育系＊	篠 崎 文 哉	国際教育部門・語学教育部門
多文化教育系	箱 崎 雄 子	グローバルセンター長
多文化教育系	橋 本 健 一	国際教育部門・語学教育部門
多文化教育系＊	POOL JUSTIN PARKER	国際教育部門・語学教育部門
多文化教育系	小 林 和 美	国際教育部門
多文化教育系	櫻 澤 誠	留学生教育部門
多文化教育系	赤 木 登 代	国際教育部門
多文化教育系	石 橋 紀 俊	留学生教育部門
多文化教育系	井 上 直 子	連携開発部門・国際教育部門
多文化教育系	亀 井 一	連携開発部門
多文化教育系	GINSBURG JASON ROBERT	国際教育部門
多文化教育系	櫛 引 祐希子	留学生教育部門
多文化教育系＊	筒 井 瑞 貴	語学教育部門
多文化教育系	中 野 知 洋	連携開発部門・国際教育部門
多文化教育系	BROWN ROBERT SANBORN	連携開発部門・語学教育部門

所 属 等	氏 名	所 属 部 門
多文化教育系＊	李 址 遠	国際教育部門・留学生教育部門
多文化教育系	城 地 茂	連携開発部門・留学生教育部門
多文化教育系	中 山 あおい	国際連携部門・国際教育部門
多文化教育系＊	米 澤 千 昌	国際教育部門・留学生教育部門
健康安全教育系	碓 田 智 子	留学生教育部門
健康安全教育系	後 藤 健 介	連携開発部門
理数情報教育系	仲 矢 史 雄	連携開発部門
理数情報教育系	望 月 久 稔	留学生教育部門
表現活動教育系	出 野 文 莉	連携開発部門

任期：令和４年４月１日～令和６年３月３１日

＊任期：令和４年４月１日～令和５年３月３１日

令和４年度グローバルセンター運営委員会名簿

所 属 等	氏 名	備 考
グローバルセンター長	箱 崎 雄 子	委員長
グローバル副センター長	中 山 あおい	副委員長
グローバルセンター連携開発部門長	中 野 知 洋	部門長
グローバルセンター国際教育部門長	橋 本 健 一	部門長
グローバルセンター語学教育部門長	POOL JUSTIN PARKER	部門長
グローバルセンター留学生教育部門	米 澤 千 昌	部門長
高度教職開発系＊	王 林 鋒	センター担当教員
多文化教育系＊	李 址 遠	センター担当教員
多文化教育系	亀 井 一	センター担当教員
多文化教育系＊	篠 崎 文 哉	センター担当教員
学術連携課国際室	林 祐美子	センター長指名

任期：令和４年４月１日～令和６年３月３１日

＊任期：令和４年４月１日～令和５年３月３１日

編集後記

本号より『グローバルセンター年報』としては、さらに発展した年報となります。年報の内容は、寄稿文を主としたものとなり、電子出版という形態も継続する予定です。

今年度も、コロナ禍のため、グローバルセンターの活動も制約を受けてしまいました。3年も続いていましたが、短期研修や交換留学の派遣など雄飛しようとした若者たちを、何とか海外へと送り出そうと心がけたいと思います。

この春、私たちに WBC に参加した日本の若者たちから、世界一という大いなる勇気をいただきました。これと同じように、現在では、PDF 形式が主力になっていますが、更なる形式が生まれることもあるかもしれません。当然、新たな媒体に移植するという作業は進められているのですが、復元が困難になってしまいます。ただ、内容さえ優れていれば、後世の人々が、そうした作業を継続してくれるでしょう。そうしたことを考えると電子媒体へと変化した『グローバルセンター年報』が、これからも絶えることなく、続いて行くことを願っております。

なお、投稿された原稿は、グローバルセンターの帰属となります。

末筆になりましたが、本誌に投稿していただいた先生方、大学生の皆様に感謝いたします。今後も、国際活動に積極的に参加していただけるようお願いいたします。

2023 年 3 月 31 日

文責・城地 茂

2023 年 3 月 31 日 発行

大阪教育大学グローバルセンター年報 第 27 号

Bulletin of Osaka Kyoiku University
Center for Global Education and Research, No. 27

編集兼発行者

大阪教育大学 グローバルセンター

〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1

電話：072-978-3299, 3300